

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公表特許公報 (A)

(11)特許出願公表番号

特表平7-502510

第3部門第2区分

(43)公表日 平成7年(1995)3月16日

(51) Int.Cl.*	識別記号	序内整理番号	F I
A 6 1 K 31/70		9454-4C	
48/00		8314-4C	
C 1 2 N 15/09		9050-4B	C 1 2 N 15/00

A

審査請求 未請求 予備審査請求 有 (全34頁)

(21)出願番号	特願平5-511195
(86) (22)出願日	平成4年(1992)12月17日
(85)翻訳文提出日	平成6年(1994)6月17日
(86)国際出願番号	P C T / U S 9 2 / 1 1 0 0 4
(87)国際公開番号	W O 9 3 / 1 2 2 4 0
(87)国際公開日	平成5年(1993)6月24日
(31)優先権主張番号	8 0 9, 2 9 1
(32)優先日	1991年12月17日
(33)優先権主張国	米国 (U S)
(31)優先権主張番号	8 9 4, 4 9 8
(32)優先日	1992年6月4日
(33)優先権主張国	米国 (U S)

(71)出願人	ザ リージェンツ オブ ザ ユニバーシティ オブ カリフォルニア アメリカ合衆国 94612-3550 カリフォルニア州 オークランド トウェンティーセカンド フロア レイクサイド ドライブ 300
(72)発明者	デブス、ロバート ジェイ. アメリカ合衆国 94941 カリフォルニア州 ミル バレー イートン ウェイ12
(74)代理人	弁理士 中島 淳 (外4名)

最終頁に続く

(54)【発明の名称】 囊胞性纖維症膜貫通型コンダクタンス調節活性 (C F T R) のための遺伝子治療

(57)【要約】

気道細胞に外来遺伝子を発現できる哺乳動物の作製方法と組成物とが開示されている。脂質キャリアー核酸複合体又は核酸のみが調製され、エアロゾル又は全身的に経て、肺のみ又は肺及び肺外組織へ送達される。本発明は、肺及び関連する肺外組織におけるC F T Rの症状発現の処置によって、肺の細胞を直接トランスフォームする方法を提供する。

## 請求の範囲

1. ヒト又は動物の体における疾患の処置又は治療方法に用いる組成物であって、該疾患は、野性型囊胞性纖維症膜貫通型コンダクタンス調節物質の不十分な量の内因性生成に関連し、該組成物は、医療的に許容可能なキャリア若しくは希釈剤中に転写カセット若しくは発現カセットを含み、該転写カセット若しくは発現カセットは、野性型囊胞性纖維症膜貫通型コンダクタンス調節活性を有する分子をコードするオープンリーディングフレームの転写産物を、該転写カセット若しくは該発現カセットをトランスクレクトされた細胞中に、生成することができるDNA配列を含む、当該組成物。

2. 前記転写カセット又は発現カセットが陽イオン性脂質キャリアと会合する請求の範囲第1項記載の組成物。

3. 前記組成物が、前記転写カセット又は前記発現カセットと前記陽イオン性脂質キャリアとが会合した後に、噴霧化される請求の範囲第2項記載の組成物。

4. 前記トランスクレクトされた細胞が迷走気道細胞又は気道粘膜下組織細胞である請求の範囲第2又は3項記載の組成物。

5. 該細胞が気管の細胞である請求の範囲第2又は3項記載の組成物。

6. 前記細胞の20~100%がトランスクレクトされる請求の範囲第4又は5項記載の組成物。

7. 前記DNA配列が誘導プロモーターを含む、請求の範囲第1又は2項記載の組成物。

8. 前記誘導プロモーターが、細胞特異性プロモーター、組織特異性プロモーター又はホルモン反応性プロモーターである、請求の範囲第1又は2項記載の組成物。

9. 前記細胞特異性プロモーター又は前記組織特異性プロモーターが囊胞性纖維症膜貫通型コンダクタンス調節物質遺伝子である請求の範囲第1、2又は8項記載の組成物。

10. 前記DNA配列が、SV40エンハンサー要素を含み、これによって前記プロモーターによる転写が増強される請求の範囲第1、2、8又は9項記載の

が、約1:1から1:2の範囲のDNA(マイクログラム)対陽イオン性脂質(ナノモル)比で前記混合物中に存在する請求の範囲第2乃至10のいずれか1項記載の組成物。

11. 請求項2乃至16のいずれか1項記載の処置又は治療方法において使用されるキットであって、該キットは：

前記転写カセット若しくは発現カセットを含む容器；

特定量の陽イオン性脂質キャリアを含む別の容器；及び、

取扱書

の組み合わせを含む当該キット。

12. 前記オープンリーディングフレームにイントロンが存在しない請求の範囲第1乃至16のいずれか1項記載の組成物。

13. 前記DNA配列が前記オープンリーディングフレームの5'側にイントロンを含む請求の範囲第1乃至16のいずれか1項記載の組成物。

14. 前記DNA配列が前記オープンリーディングフレームの3'側に広がるイントロンを含む請求の範囲第1乃至16のいずれか1項記載の組成物。

15. 前記処置又は治療方法が前記組成物の噴霧化後の口内又は鼻孔内投与である請求の範囲第1又は2項記載の組成物。

16. 前記処置又は治療方法が前記組成物の静脈内注入である請求の範囲第1又は2項記載の組成物。

17. 前記処置又は治療方法が前記組成物の噴霧化後の口内又は鼻孔内投与と該組成物の静脈注入との組み合わせである請求の範囲第1又は2項記載の組成物。

18. 前記囊胞性纖維症膜貫通型コンダクタンス調節物質(CFTR)遺伝子がヒト野性型遺伝子である請求の範囲第9項記載の組成物。

19. 前記オープンリーディングフレームが野性型ヒトCFTRの生物活性を有する分子をコードしている請求の範囲第1乃至24項のいずれか1項記載の組成物。

20. 前記オープンリーディングフレームが野性型ヒトCFTR遺伝子由来である請求の範囲第1乃至24項のいずれか1項記載の組成物。

21. 前記DNA配列がCFTR遺伝子以外の他の遺伝子由來の1以上のエン

## 特表平7-502510 (2)

### 組成物

1. 前記陽イオン性脂質キャリアが、N-(1-2,3-ジオレイロキシ)プロピル-N,N,N-トリエチルアンモニウム(DOTMA)；ジメチルジオクタデシルアンモニウムプロマイド(DDAB)；1,2-ジオレオイロキシ-3-(トリメチルアンモニオ)プロパン(DOTAP)；リシニルホスファチジルエタノールアミン(L-PE)；ジステアロイルホスファチジルエタノールアミン(DOPE)；及びコレステロール(Chol)からなる群より選ばれた脂質を含む請求の範囲第2乃至10のいずれか1項記載の組成物。

2. 前記陽イオン性脂質キャリアが、コレステロールと、N-(1-2,3-ジオレイロキシ)プロピル-N,N,N-トリエチルアンモニウム(DOTMA)；ジメチルジオクタデシルアンモニウムプロマイド(DDAB)；1,2-ジオレオイロキシ-3-(トリメチルアンモニオ)プロパン(DOTAP)；及び、リシニルホスファチジルエタノールアミン(L-PE)からなる群より選ばれた脂質を含む請求の範囲第2乃至10のいずれか1項記載の組成物。

3. 前記陽イオン性脂質キャリアが、ジステアロイルホスファチジルエタノールアミン(DOPE)と、N-(1-2,3-ジオレイロキシ)プロピル-N,N,N-トリエチルアンモニウム(DOTMA)；ジメチルジオクタデシルアンモニウムプロマイド(DDAB)；1,2-ジオレオイロキシ-3-(トリメチルアンモニオ)プロパン(DOTAP)；及び、リシニルホスファチジルエタノールアミン(L-PE)からなる群より選ばれた脂質を含む請求の範囲第2乃至10のいずれか1項記載の組成物。

4. 前記陽イオン性脂質キャリアが、小さな単ラメラ小胞である請求の範囲第2乃至10のいずれか1項記載の組成物。

5. 前記小さな単ラメラ小胞が、(a)ジステアロイルホスファチジルエタノールアミン(DOPE)とN-[1-2,3-ジオレイロキシ]プロピル-N,N,N-トリエチルアンモニウム(DOTMA)、又は(b)ジメチルジオクタデシルアンモニウムプロマイド(DDAB)とコレステロール、を含む請求の範囲第14項記載の組成物。

6. 前記転写カセット若しくは発現カセットと前記陽イオン性脂質キャリア

ハンサー要素を含む請求の範囲第9又は24~28のいずれか1項記載の組成物。

7. 請求項2乃至27のいずれか1項記載の処置又は治療方法において使用されるキットであって、該キットは：

前記転写カセット若しくは発現カセットを含む容器；

特定量の陽イオン性脂質キャリアを含む別の容器；及び、

取扱書

の組み合わせを含む当該キット。

## 明細書

## 囊胞性纖維症膜貫通型コンダクタンス調節活性(CFTR)のための遺伝子治療

## 序論

## 技術分野

本発明は、囊胞性纖維症膜貫通型コンダクタンス調節活性を有する分子をコードする外來核酸を含むトランスクレッジン(遺伝子導入)哺乳動物を作製するための方法及び組成物に関する。該核酸は、特に肺の気道及び肺胞への、エアゾル化送達(デリバリー)によって又は全身性送達によって供給される。

## 背景

多くの遺伝子疾患が、特定タンパク質の欠失又は変異例えは該当遺伝子内部の欠損によって生じる。ヒトにおいて最も一般的であり危険な遺伝子疾患のひとつは、囊胞性纖維症(CF)である。囊胞性纖維症(CF)は、外分泌組織機能不全の範囲のものであり、これは最終的には呼吸不全を引き起こし死ぬもので、囊胞性纖維症膜貫通型コンダクタンス調節物質(CFTR)遺伝子の変異による。CFTR遺伝子は、正に染色体7q31に位置し、クローニングされている。アミノ酸位置508のフェニルアラニン残基の損失による3bpの欠損が約7.0%のCF染色体に存在するが、正常染色体においては認められない。他の3.0%のCF変異は様々であり、欠損、ミスセンス及びスプライス部位変異が含まれる。更に単一の正常なCFTR遺伝子のコピーのトランスクレッジョンは、CF細胞株におけるCF分泌の欠陥を廃止し、これはCFのための遺伝子治療の可能性を支持する。これらの結果は、野生型CFTR注入遺伝子(transgene)の発現が、内因性変異体CFTR遺伝子を同時に発現しているCF細胞において、優性に正の効果を発揮することを証明する。従って、CF患者の肺中の野生型CFTR注入遺伝子の発現は、CF表現型を正すことができる。しかし、現在までにエプロソル又は静脈(in v)投与による肺での注入遺伝子の高レベル発現の実

現の不能が、CFの治療のための遺伝子治療の使用を妨げている。CF患者からの細胞における野生型CFTR注入遺伝子の発現は、CFの初期生化学的障害である塩素分泌欠陥を正す。塩素分泌は変異体CFTRタンパク質の存在にも拘らず、CF患者の細胞において正常化され、これは、野生型及び変異体CFTRタンパク質が細胞中で共に発現している場合に野生型CFTRが優性であることを示す。

これまで、ヒト患者における欠失又は変異した遺伝子を置換する試みは、ex vivo(体外的)技術に依存してきた。ex vivo技術には、裸のDNA又はリボソームに被包されたDNAによってin vitroで細胞をトランスクレッジョンして、その後に好適宿主器官に導入すること("ex vivo"遺伝子治療)が含まれるが、これに限らない。好適器官の基準には、移植標的器官が問題の疾患の部位であること、疾患がわかりやすいこと、in vitroで操作可能であること、遺伝子改変方法が行いやすいことであり、また非複製細胞又はサイクリング(細胞周期をまわっている)幹細胞を含み遺伝子修正を永続できることが理想的である。また、遺伝的に改変された細胞を機能的且つ安定した形で生体に再移植可能なことも必要である。ex vivo遺伝子治療の要件は、この他に、例えばレトロウイルスベクターを用いる場合、細胞が有糸分裂前であることである:有糸分裂後の細胞は、レトロウイルスベクターによる感染に無反応性である。ex vivo治療には幾つかの欠点がある。例えば、分化し、複製中の細胞のみが感染すると、新たに導入された遺伝子機能は、その細胞が成熟して死滅すれば失われてしまう。ex vivo的手段は、また限られた数の細胞のトランスクレッジョンにしか利用できず、生体から最初に取り出されたものでない細胞をトランスクレッジョンには利用できない。in vivo(体内的)遺伝子移入の基準に合った標的器官の例は哺乳動物の骨髄であり; 哺乳動物の肺は、ex vivo治療のための良い候補ではない。

動物モデルの研究では、遺伝子移入の効率を高めるために、レトロウイルス、アデノウイルス及びリボソームが用いられてきた。リボソームは、薬物、放射線治療薬、酵素、ウィルス、転写因子及び他の細胞活性因子を種々の培養細胞株及び動物へ効率的に導入するために用いられている。更に、リボソーム仲介薬物送達の効率を試験するための好結果をもたらす臨床実験が完成している。い

くつかの戦略が、リボソーム仲介薬物送達の効率を、特定の組織及び特定の細胞型にリボソームを向けることによって上げることを提案している。しかし、リボソーム仲介ベクターの使用のための基本的な方法論が十分に開発されている一方で、この技術がin vivo遺伝子治療におけるリボソーム主体トランスクレッジョンベクターについて完成していない。今日までに確立されている研究ではベクターの静脈内的、気管内又は特定組織への注入は、低いが証明可能な発現をもたらすが、この発現は、一般にひとつの組織、普通は注入された組織(例えば筋肉)か、静脈注入が用いられた場合の肝臓若しくは肺か; 気管内注入が用いられた場合の肺かに限定され、これらは組織内の全細胞の1%未満がトランスクレッジョンされた。

注入遺伝子のin vivo発現は、注入遺伝子の特定組織への直接的な注入、例えは裸のDNA又はDNA-陽イオン性リボソーム複合体の直接的気管内、筋肉内若しくは動脈内注入に、又は宿主細胞のex vivoトランスクレッジョン及びその後の再注入に拘束されていた。近年有効な遺伝子送達戦略は、一様に、in vivoにおける高レベル及び/又は広汎性的注入遺伝子発現の生成に失敗していた。陽イオン性ベクター及びアデノウイルスベクター中にパッケージングされたいずれかの導入遺伝子の発現は、気管内(1T)点滴後にげっ歯類の肺において証明された。しかし、1T注入は侵襲性であり、点滴物の不均一な分布をもたらす; また、ヒトにおいて繰り返し実施するには侵襲性過ぎる。欠陥が肺中での主要な生命危機の欠陥であるCF患者にとって、非侵襲性送達技術の開発は興味を引くものであり、またこれは他の方法で行うよりも、肺への外來核酸コンストラクトのより深い侵入をもたらし、CFTR遺伝子コンストラクトを、気道上皮細胞及び気道粘膜下細胞型の両方をトランスクレッジョンするとの同様に、遠位気道に亘って沈着するために用いられることがある。CF患者における他の器官が変異体CFTR遺伝子の存在のために作用される場合、広い範囲の組織のトランスクレッジョンの技術は、CF患者における肺臓外器官不全を軽減するために興味あるものとなろう。

## 関連文献

欧州特許出願第91301810.8号(公告番号第0446017A1号)には、囊胞性纖維症膜貫通型コンダクタンス調節物質(CFTR)タンパク質をコードする完全単離DNA及びその種々の変異体が開示されている。トランスクレッジョンされた培養COS-7細胞におけるCFTRの一過性発現もまた開示されている。リック(Rick)ら、Nature(1990)347:358-363及びグレゴリー(Gregory)ら、Nature(1990)347:382-386には、ワクシニアウイルスベクターを用いた培養HeLa細胞における囊胞性纖維症膜貫通型コンダクタンス調節遺伝子の発現が開示されている。ヨシムラらは、裸のDNA及びリボフェクチンに複合されたDNAとしてCFTR遺伝子を含むプラスミドの気管内投与後におけるマウス肺における該遺伝子の発現を開示している。

ブリガム(Brighton)ら、Am. J. Med. Sci.(1989)288:278-281は、リボソームビヒクルを用いたCAT遺伝子によるマウス肺のin vivoトランスクレッジョンについて開示している。トランスクレッジョンは、静脈内、気管内又は腹腔内注入によって実施された。静脈内及び気管内投与は共に、肺におけるCAT遺伝子の発現をもたらした。しかし、腹腔内投与はもたらさなかった。ウェルザー(Werthers)、Clinical Research(1991)39:(抄録)も参照のこと。

カノニコ(Canonico)ら、Clin. Res.(1991)39:219Aは、培養ウシ肺上皮細胞においてCMVプロモーターによるヒト $\alpha$ -1抗トリプシン遺伝子の発現を記述している。該遺伝子は、陽イオン性リボソームを使って培養中の細胞に添加した。この実験では、リボソームに複合された遺伝子コンストラクトの静脈内送達後に、ニュージーランド白ウサギの肺の組織学検査用切片に $\alpha$ -1抗トリプシンの存在が認められた。ヨシムラらは、気管内プラスミド仲介遺伝子移入後のマウス肺における、ヒト囊胞性纖維症膜貫通型コンダクタンス調節物質遺伝子の発現を開示している。

機能的な新規遺伝物質の細胞への導入のための複数の手段は、in vitro及びin vivoの両方で試みられた(フリードマン(Friedmann), (1989) Science, 244:1275-1280)。これらの手段には、改変レトロウイルスへの発現すべき遺伝子の組み込み: ローゼンバーグ(Rosenberg)(1991) Cancer Research 51(18)、追加: 5074S-5078S; 非レトロウイルスベクターへの組み込み(ローゼンフェルド(Rosen

## 特表平7-502510 (4)

feld)ら、(1992) Cell, 68:143-155; ローゼンフェルドら、(1991) Science, 252: 431-434; 又は、リボソームを経た異種プロモーター-エンハンサー成分に連結された注入遺伝子の送達 (フリードマン、(1989)、前出; ブリガムら、(1989) Am. J. Med. Sci., 298:278-281; ナーベル(Nabel)ら、(1990) Science, 249:1285-1288; ハジンスキ(Hazinski)ら、(1991) Am. J. Resp. Cell Molec. Biol., 4:206-209; ワンとホアン(Huang)、(1987)、Proc. Natl. Acad. Sci., USA., 84:7815-7855; リガンド特異性、陽イオン主体輸送システムとの結合 (ウー(Wu)及びウー、(1988) J. Biol. Chem., 263:14621-14624) 又は裸のDNA発現ベクターの使用 (ナーベルら、(1990)、前出; ウォルフ(Wolff)ら、(1990) Science, 247:1465-1468) が含まれる。注入遺伝子の組織への直接注入は、局所的な発現のみをもたらす (ローゼンフェルド、(1992)前出); ローゼンフェルドら、(1991)、前出; ブリガムら (1989)、前出; ナーベル、(1990)、前出; 及びハサンスキら、(1991)、前出)。ブリガムらのグループ(Am. J. Med. Sci. (1989) 298:278-281 及びClinical Research (1991) 39 (抄録))は、DNAリボソーム複合物の静脈内又は気管内投与の後のマウスの肺のin vivoトランسفエクションのみを報告している。ヒト遺伝子治療手法の紹介記事の例は: アンダーソン(Anderson)、Science (1992) 256:808-813がある。

PCT/U S 90/01515(フェルナー(Felgner)ら)は、in vivoでの脊椎動物の細胞の内部への医療的又は免疫的ポリペプチドをコードする遺伝子の送達の方法に向けられている。注入遺伝子の発現は、注入組織に限定されている。PCT/U S 90/06993(ブリガム)は、発現コンストラクトの静脈内又は気管内注入の後の哺乳動物肺細胞における注入遺伝子の発現を得るために方法に向けられている。PCT/89/02468 及びPCT/90/06997は、ex vivo 遺伝子治療に向けられ、これは、体内から取り出すことができる細胞例例えばリンパ球における注入遺伝子の発現に限定されている。PCT 89/12109は、同様にex vivo 遺伝子治療に向けられている。PCT 90/12878は、トランスフォームした細胞株及びex vivo トランスフォーメーションを用いたトランスジェニックマウスの両方における高レベルな発現を提供する。

デブス(Debs)らは、エアロゾル化及びリボソーム中での送達による肺へのペニ

1 μgのDNAに対して5 nmolの陽イオン性脂質であった。100 μgのDNA投与量で、マウス毎に注入された。この視野は、肺胞及び肺胞管壁細胞を示し、この大部分 (50%~70%) が、抗CAT抗体をプローブとしてアルカリホスファターゼを用いて映像化した場合に、CATタンパク質の存在に対して陽性に染色している。処理動物の肺は、肺胞及び血管内皮細胞を含めて均一に拡散して染色されている。気道上皮染色は、気道もトランسفエクトされることを示している。CAT (クロラムフェニコールアセチルトランスクレーヴ) タンパク質は、普通、哺乳類細胞には存在せず、従って、これらの細胞中のCATタンパク質の存在は、これらがin vivoでトランسفエクトされたことを示している。図2Bは、静脈注入脂質キャリアのみで処理され、抗CAT抗体をプローブとして用いた対照動物からのマウス肺の切片を示している。細胞は、顕著な染色を示さず、低レベルのバックグラウンド染色がいくらく肺胞マクロファージにおいて検出可能であり、これは内因性のアルカリホスフェート活性を有する。

図3は、pZN20のコンストラクションを示している。

図4は、細胞表面リセプターに結合した後の、陽イオン性脂質キャリア: DNA複合体 (DOTMA:DOPE:pRSV-CAT) が伝統的なリセプター仲介エンドサイトシスを経て細胞に取り込まれたことを証明する電子顕微鏡写真を示している。脂質キャリアは1:1のDOTMA:DOPEであった。20 μgのDNAは20 nmolの陽イオン性脂質と複合された。

図5は、pZN20:DDAB:DOPE複合体の静脈注入後の表示組織内におけるCAT遺伝子発現を示している。脂質キャリアは、DDAB:DOPEが1対1モルであった。2つの脂質キャリア対プラスミド比 (nmol陽イオン性脂質 μgプラスミドDNA) が用いられ、MLVは6:1、及びSUVは3:1であった。レーン1~6は肺組織; レーン7~12は心臓組織; レーン13~18は肝臓; レーン19~24は腎臓; レーン25~30は脾臓; レーン31~36はリンパ節からの試料である。各組織セットの最初の3つは、MLVと共に注入された動物からのものであり、各組織の次の3つはSUVと共に注入された動物からのものであった。レーン1~18では、クロマトグラフィーを下部から上部へ向かって流し、レーン19~36はクロマトグラフィーを上部から下部へ向かっ

て流した。これら結果は、pZN20:DDAB:DOPE複合体の静脈注入が6つの異なる組織において有意なレベルのCAT遺伝子発現をもたらすことを証明している。更に、MLVは同一脂質から構成されたSUVの場合と等しい又はより大きいレベルのin vivo 遺伝子発現を示すようである。

図6は、pZNS-CATプラスミドに複合されたDOTMA:DOPEの静脈注入の結果がin vivoでの検出可能なCAT発現をもたらさないことを示している。図6Aは脂質キャリアのみ (レーン1~4) 又は脂質キャリア+DNA (レーン5~8) を用いた静脈注入後2日の肺、脾臓、肝臓及び心臓の解析を示している; 図6Bは、マウス肺、脾臓、肝臓及び心臓での6日めの結果を示している (脂質キャリアはDOTMA:DOPE 1:1モルであった)。陽イオン性脂質対DNA比は、1 μgに対して4 nmolであった。100 μgDNAがマウスに対して注入された。両方の図において、クロマトグラフィーは下部から上部へ向かって流れている。

### 図面の簡単な説明

図1は、対照マウス (図1B及び1D) と、DDAB:コレステロール (以下、Chol) (1:1) リボソームと複合されたヒトCFTR遺伝子 (pZN32) を含むプラスミドで処理されたマウス (図1A、1C及び1E) との肺の凍結切片の顕微鏡写真を示す。図1A、1C及び1Eは、各々、50倍、100倍及び250倍での処理マウスの肺切片である。図1B及び1Dは、倍率50×及び100×の未処理 (対照) マウスからの肺切片である。脂質キャリアは、1対1モルのDDAB:Chol (SUV) であった。脂質キャリア-DNA複合体は、1 μgにDNAに対して5 nmolの陽イオン性脂質であった。

図2Aは、pZN27:DDAB:Chol発現ベクター-陽イオン性脂質キャリア複合体の静脈注入後4時間のマウス肺の切片を示す。脂質キャリア組成物は、1:1モルのDDAB:Cholであった。脂質キャリアプラスミド率は、

て流した。これら結果は、pZN20:DDAB:DOPE複合体の静脈注入が6つの異なる組織において有意なレベルのCAT遺伝子発現をもたらすことを証明している。更に、MLVは同一脂質から構成されたSUVの場合と等しい又はより大きいレベルのin vivo 遺伝子発現を示すようである。

図6は、pZNS-CATプラスミドに複合されたDOTMA:DOPEの静脈注入の結果がin vivoでの検出可能なCAT発現をもたらさないことを示している。図6Aは脂質キャリアのみ (レーン1~4) 又は脂質キャリア+DNA (レーン5~8) を用いた静脈注入後2日の肺、脾臓、肝臓及び心臓の解析を示している; 図6Bは、マウス肺、脾臓、肝臓及び心臓での6日めの結果を示している (脂質キャリアはDOTMA:DOPE 1:1モルであった)。陽イオン性脂質対DNA比は、1 μgに対して4 nmolであった。100 μgDNAがマウスに対して注入された。両方の図において、クロマトグラフィーは下部から上部へ向かって流れている。

図7はプラスミドpZN27のコンストラクションを示している。

図8は、pZN27のみ又はpZN27:DDAB:Chol-SUV複合体を用いて静脈内注入後の指示された組織におけるCAT遺伝子発現を示している。図8Aのレーン1~10は肺; レーン11~20は心臓; レーン21~30は肝臓; レーン31~40は腎臓; 図8Bのレーン1~10は脾臓; レーン11~20はリンパ節である。10の各組織セットは、順に下記のもので処理された試料を含む: 2試料、500 μgDNA; 2試料、1 mgDNA; 2試料、2 mgDNA; 2試料、500 μgDNA 2回; 2試料、脂質キャリア-DNA複合体 100 μgDNA。図8Aでは、レーン1~20は下部から上部へクロマトグラフィーを流している; 図8Bレーン21~40ではクロマトグラフィーを上部から下部へ流している。図8Bレーン1~20では、クロマトグラフィーを下部から上部へ流している。脂質キャリアは1対1モルDDAB:Cholとした。脂質キャリア-DNA複合体は1 μgDNAに対して5 nmol陽イオン性脂質であった。

図9は、pRSV-CAT:L-P-E:CEBA複合体の静脈注入後の肺におけるCAT発現を示している。レーン1~3は、未処理マウス肺からの試料であ

## 特表平7-502510 (5)

り、レーン4は脂質キャリアのみで処理したマウスからの肺試料のものであり、レーン5は脂質キャリアー-DNA複合体で処理したマウスからの試料である。脂質キャリアーは1対1モルレーティングE:CEBAであった。脂質キャリアー-DNA複合体は、1μgDNAに対して1nmolの陽イオン性脂質であった。100μgDNAをマウス毎に注入した。クロマトグラフィーは図において示されるように下部から上部へ流している。

図10は、プラスミドpZN32のコンストラクションを示している。  
図11は、プラスミドpZN51のコンストラクションを示している。

図12は、プラスミドpZN60、pZN61、pZN62及びpZN63のコンストラクションを示している。図12Aは、中間体プラスミドpZN52、pZN54、pZN56及びpZN58のコンストラクションを示している。図12Bは、中間体からの最終プラスミドpZN60～pZN63のコンストラクションを示している。

図13は、マウスにおける静脈内に注入した6の異なるプラスミドに対するCATアッセイの薄層クロマトグラフィーのオートラジオグラフィを示している。レーン1～12は、肺組織におけるCAT活性を示し；レーン13～24は肝組織におけるCAT活性を示している。レーン1、2、13、14はpZN51であり；レーン3、4、15、16はpZN60であり；レーン5、6、17、18はpZN61であり；レーン7、8、19、20はpZN62であり；レーン9、10、21、22はpZN63であり；レーン11、12、23、24はpZN27である。脂質キャリアーはDDAB:Chol(1:1)であった。脂質キャリアー-DNA複合体は、1μgDNAに対して5nmol陽イオン性脂質であった。100μgDNAをマウス毎に注入した。各レーンは单一マウスを表す。クロマトグラフィーは示される図の下部から上部へ流れている。

図14(A-F)は、未注入マウス(レーン1～3)、pBE3.8CAT(レーン4～6)又はpC1S-CAT(レーン7～9)を有する静脈内注入されたマウスからの心臓(14A)、脾臓(14B)、肺(14C)、リンパ節(14D)、腎臓(14E)及び肺の内膜(14F)におけるCAT活性を示している。

するため作られた拘束器に入れた後に小型改良マウスケージ内でエアロゾルに曝露したマウスで得られた結果である。

図22は、DOTMA:DOPEリボソーム2.4μmolに複合されたpC1S-CATプラスミド1.2mgを含有するエアロゾルを受けた72時間後に犠牲死させられたマウス(A、B、C、D)、及び未処置マウス(E、F)からの肺切片における細胞内CATタンパク質に免疫染色した結果である。Dに示した切片は、抗CAT抗体の代わりに正常ウサギ血清で処理したものを示した。倍率は、A、Dが50倍、B、C、Eが250倍である。

図23は、CMV-CATプラスミドのみ1.2mg、又はDOTMA:DOPE(1:1)リボソーム2.4μmolに複合されたCMV-CATプラスミド1.2mgを含有するエアロゾルを受けた72時間後に犠牲死させたマウスからの肺抽出物におけるCAT活性を示している。未処置マウスもアッセイした。

図24は、(A) DOTMA:DOPEリボソーム2.4μmolに複合されたpC1S-CATプラスミド1.2mgを含有するエアロゾルを受けた1～21日に犠牲死させたマウスの肺抽出物におけるCAT活性；及び(B)マウスからのいくつかの異なる組織抽出物CAT活性を示しており、注入遺伝子の発現が、図24Aにおいて、3日目に犠牲死された正常マウスへのDNA-リボソーム複合体のエアロゾル投与後に肺に特異的であることを示唆している。対照抽出物は、精製CAT酵素を含む。

図25は、DOTMA:DOPEリボソーム2.4μmolに複合されたpC1S-CATプラスミド1.2mgを含有するエアロゾルを受けた直後に犠牲死させたマウスの肺から(レーン1～4、レーン6～9)、及び対照の未処理マウス(レーン5)から得られたゲノムDNAのサンプロットハイブリダイゼーションを示す。試料を制限酵素HindIIIで消化し、1.6kbのCATフラグメントをプローブとした(上図)。同ジメブレンを、マウス因子VIII、Aゲノムクローンから得た1.1kbのBSU36-1單一コピーをプローブに用いてハイブリダイズさせた(下図)。

図26(A-F)はCMV-CAT(図21A及び21D)、CFTR-CAT(図21B及び21D)並びに対照動物(図21C及び21E)で注入された

図15は、pZN13のコンストラクションを示している。

図16は、pZN29のコンストラクションを示している。

図17は、pZN32のコンストラクションを示している。

図19は、図19AではHCMV(Towne)及び図19CではHCMV(AD169)の、前初期エンハンサー及びプロモーター領域のHCMV(Towne)の完全制限地図を示している。図19Bは、2つのHCMVプロモーターの配列比較を示している。Towne株の配列は、この比較においてhs5m1e1として表されている。NcoI部位はアスタリスクで表示されている。

図20は、pRSV-CAT-DOTMA:コレステロール複合体のエアロゾル投与がマウス肺にCAT遺伝子の発現をもたらしたことを示す。レーン1～3は未処置マウス、レーン4～6は0.5mgのpRSV-CATと1.0μmol DOTMA-コレステロール・リボソーム投与のマウス、レーン7～9は2.0mgのpRSV-CATのみ投与のマウス；及び、レーン10～12は2.0mgのpRSV-CATと4.0μmolのDOTMA-コレステロール・リボソームをモル比2:1で投与したマウスから得られた結果であった。CAT遺伝子は、通常は哺乳類動物の細胞には存在しない；従って、この結果から、pRSV-CAT-DOTMA-コレステロール・リボソーム・エアロゾルにより肺がうまくトランスフェクションされたことがわかる。また、pRSV-CAT単独エアロゾル投与も、より低いエアロゾル投与量のpRSV-CAT:DOTMA-コレステロール複合体も、マウス肺に検出可能なCAT遺伝子の発現がもたされなかつたを示している。従って、陽イオン性リボソームキャリア、及び十分な投与量のDOTMA:リボソーム複合体の両方が、エアロゾル投与後に肺で注入遺伝子の発現をもたらすために必要であり、リボソームとDNAとを好適な比で且つ好適な割合で与えた場合に、注入遺伝子発現が最大となる。

図21は、DOTMA/DOPE:1リボソーム2.4μmolに複合させた1.2mgのpC1S-CATをマウスに投与した実験の結果を示す。レーン1～3はイントックス設計の鼻エアロゾルチャンバー内でエアロゾルを投与したマウスの結果を示し；レーン4～7は改良型のマウスケージ内でエアロゾルに曝露したマウスからのものであり、レーン8～10はもともとイントックスチャンバーで使用

マウスの肺におけるCAT活性の組織学解析を示している。

### 特定具体例の説明

本発明によると、核酸コンストラクトとその調製及び使用方法とが提供される。これは、十分な投与量の脂質キャリアー核酸エアロゾルを宿主哺乳動物に送達して又は裸の若しくは脂質キャリアと複合した十分な投与量の核酸を全身性送達して宿主細胞のトランスフェクションを行った後、宿主哺乳動物の気管中の細胞の表現型及び/又は遺伝子型をin vivoで修正可能にするものである。核酸は野性型CFTRの生物活性を有する分子をコードするヌクレオチド配列であり、転写された場合に、内因性CFTR遺伝子特に変異体CFTR遺伝子の発現を遮断するために十分な量及びサイズの正常転写産物に相補的なmRNAを精製する配列である。肺気道細胞における野性型CFTRとCF患者で機能不全である肺外細胞との発現が特に対象となる。従って、ここで用いられる“核酸”とは、CFTR活性を有する分子をコードするセンス又はアンチセンス鎖を指す。脂質キャリアー核酸エアロゾルは、脂質キャリアー核酸複合体の凝集を最小限に抑える生物学的に適合可能な液体で調製した脂質キャリアー核酸試料混合物を噴霧することによって得られる。この方法及び組成物、肺組織、特に肺胞及び気道細胞に、また非肺臓組織における適当な外分泌細胞型に、CFTR活性を有する分子をコードする外来核酸を含有する哺乳動物を作製するために用いることができる。

本発明の中心は、肺細胞をエアロゾル投与又は全身性投与を経てトランスフェクションすることができることを見出した点である。この発明では、高投与量の裸の核酸を使用することもできる一方で、送達機構として脂質キャリアを使用する利点がある。脂質キャリアは、得られる複合体が噴霧化されて注入され得る若しくは噴霧装置を使用して、特定の肺組織へ送達され得るように、電荷のやりとりを通じて安定的に結合することができる。脂質キャリアには、リボソーム及びミセルがあり、また修飾されたホスホクリセリド、特にアルカリホスホグリセリドを含む生分解性陽イオン化合物が含まれるが、これらに限定されるものではない。

脂質キャリア、特にリボソームは、とりわけ薬物、放射線治療剤、酵素、ウィ

ルス、転写因子及びその他の細胞性エフェクターを様々な培養細胞株及び動物に導入することに効果的に用いられている。更に、細胞外で作用する小物分子及びペプチドのリポソームが介在送達の有効性を調べる臨床実験の好ましい成績も報告されている。しかし、リポソーム介在ベクターを用いた基本的方法論は十分開発され、安全であることも明らかになっているが、変異体CFTR遺伝子に関する遺伝子疾患のin vivo遺伝子治療のために、肺組織及び特定の肺臓外組織への核酸の送達のための技術は、これまでのところまだ開発されていない。in vivo遺伝子治療とは、変異体若しくは欠損CFTR遺伝子及び遺伝子産物に関する疾患の予防、軽減及び／又は治療のための外来核酸の転写及び／又は翻訳を意味する。

脂質キャリアー核酸コンストラクト含有液のエアロゾル化送達又は全身性送達後に肺細胞のトランسفォーメーションをもたらしたり、高レベルの発現を達成するための特定の脂質キャリアー核酸複合体の相対的能力に影響を及ぼしうる要因も幾つか確認されてきている。エアロゾル化送達のために、これらの要因としては、(1)噴霧前又は噴霧中に大(マクロ)凝集体を生じず、従って核酸がせん断によってフラグメントにならないような溶液の調製、並びに(2)脂質キャリアー核酸複合体のエアロゾル化及び宿主動物への投与の後に、宿主肺細胞で予想されるトランسفォーメーションをもたらす発現コンストラクトと脂質キャリアとの両方の調製が含まれる。その他の要因としては、溶液調製に使用する希釈液並びに、エアロゾル化若しくは全身性送達のために噴霧するための溶液中の脂質キャリア：核酸比がある。

核酸-脂質キャリア複合体のエアロゾル化送達は、他の投与方法に比べて多くの利点がある。例えば、エアロゾル投与は、宿主に対する毒性を減らすのに役立つことができる。ベンタミジンやサイトカインなどの物質の送達でこうした効果が認められている。これらの物質は全身投与するとときわめて毒性が高くなり得るが、エアロゾル化すると寛容性がよい。例えば、デブスら、Antimicrob Agents Chemother. (1987) 31:37-41; デブスら、Amer. Rev. Respir. Dis.(1987) 135:731-737; デブスら、J. Immunol. (1988) 140:3482-3488; モンゴメリー(Montgomery)ら、Lancet (1987) ii:480-483; モンゴメリーら、Chest (1988) 95:747-751; ル

ーング(Lecung)ら、N. Eng. J. Med. (1990) 323:769-775を参照。更に、肝臓及び脾臓の摘出による循環リポソームの急速なクリアランスも回避されるので、対象部位即ち肺に投与した物質が存在し続けることができる。治療薬の血清誘導不活化も減少する。この肺細胞トランسفェクション方法では、宿主哺乳動物の性臓への曝露が避けられるので、生殖系細胞のトランسفェクションを防げる。

本発明のこの他の利点には、投与が容易であることが含まれ、宿主哺乳動物は、エアロゾル化された脂質キャリアー核酸溶液を目的の組織即ち肺に向けて吸入するだけでよい。更に、噴霧される粒子の大きさを変えることによって、エアロゾルを肺のどこまで送達するかもある程度制御することができる。送達は長期間に延長され得る。従って、標的細胞が発現コンストラクトに曝露される時間が有意に増加される。エアロゾルの分布領域は、スプレーが到達する肺の全領域にまで及ぶ。これらの利点は、気管内送達のような他の投与経路と比較すると特に意義のあるものである。気管内投与は侵襲性であり、核酸発現コンストラクトは大きな塊となって送達されて、粘膜障壁を崩壊し得、その上、導入された液が肺のより低い領域に貯留してしまうこともある。気管内チューブの挿入による損傷は、トランسفェクトされるべき発現コンストラクトに接触する細胞の能力を変化し得る。

本発明に用いられているベクターのタイプも、他の有効なシステムにおける利点となる。例えば、大部分の遺伝子治療戦略は、レトロウイルス又はDNAウイルスのベクターへの注入遺伝子挿入に依存してきた。脂質キャリアの利用と比較した場合のレトロウイルスベクターの潜在的欠点には、(ex vivo とは逆に) in vivo の注入遺伝子発現を仲介するレトロウイルスの能力限界；レトロウイルスは非分裂細胞をトランسفェクトするができないこと；複数欠損レトロウイルスベクターにおける組換え現象の可能性、これは、感染レトロウイルスを生じる；宿主細胞ゲノムDNAへの注入遺伝子のランダム挿入による癌遺伝子の活性化又は腫瘍抑制遺伝子の阻害可能性；大きさの制限(レトロウイルスベクターにパッケージングできるのは15 kb未満のDNAであるが、脂質キャリアは25.0 kb以上のDNA配列を哺乳動物細胞に送達するために用いることができる)；並びに、ベクターに対する宿主の免疫応答を誘発する慣用ベクターの潜在的な免疫原性が

含まれる。更に、どのex vivo 方法でも、体から取り出した細胞を一定時間培養して維持する必要がある。培養中に、細胞が有害な或いは潜在的に危険な表現型及び／又は遺伝型の変化を起こし得る。アデノウイルス及び他のDNAウイルスベクターも、上記の潜在的限界の幾つかを共有する。特にヒトで使用するには、また獣医学でも反復使用するときには、非感染性、非免疫原性及び非変異原性であり、且つ、宿主にとって無毒である及び／又は容易に排泄される天然化合物にまで宿主哺乳動物によって代謝又は排泄される分解可能な、脂質キャリアが使用され得る。

本発明で使用されるコンストラクトには、当該コンストラクトの用途に応じていくつかの形がある。従って、コンストラクトにはベクター、転写カセット、発現カセット及びプラスミドが含まれる。好ましくは、転写及び翻訳開始領域(時として“プロモーター”とも呼ばれる)は、転写開始調節領域と翻訳されない5'側配列の翻訳開始調節領域即ちリボソームへのmRNAの結合及び翻訳開始に寄与する“リボソーム結合部位”が入っていることが望ましい。開始制御領域の転写及び翻訳機能要素は、同一の遺伝子から由来又はこれから入手可能であることが望ましい。ある具体例では、プロモーターはエンハンサーなどの配列の追加、又は必須でない及び／又は望ましくない配列の削除によって改変される。“入手可能”とは、対象DNAの転写の所望な特異性を提供するために、本来のプロモーターと類似しているDNA配列を有するプロモーターを意図している。これには、天然配列と合成配列、更には合成配列と天然配列の組合せによる配列が含まれる。

核酸コンストラクトは一般に転写カセットとして提供される。イントロンはこのコンストラクトに任意的に含まれ得、好ましくは2 100 bpでありコーディング領域の5'側に配置される。一般に、コンストラクトは宿主細胞ゲノムへ組み込まれず、コンストラクトは非組み込み発現カセットの一部として宿主へ導入されることが望ましい。コーディング領域は、DNAポリメラーゼがプロモーター配列に結合し、センス鎖又はアンチセンス鎖において、mRNAへコーディング配列を転写する際に、細胞内の転写調節領域に“操作可能に連結される”か、若しくは“その制御下にある”。従って、該核酸配列は、治療効果に直接又は間接

的に寄与するCFTRの生物活性を有するポリペプチドをコードするDNA配列と、ヌクレオチド配列例えはアンチセンス配列及びリボザイムをコードするヌクレオチド配列と、を含む。

ある場合には、高レベルでの宿主細胞ゲノムDNAへの組み込みによって又は安定したエピリーム形態でのin vivo の細胞の核内の転写カセットの存続によって、in vivo での長期維持効果をもたらすコンストラクトを用いることが所望され得る。in vivo における宿主細胞のゲノムDNAへの転写カセットの組み込みは、直線化形態の注入遺伝子(コーディング領域のみ又は5'及び3'調節配列と共に有するコーディング領域であるが、如何なるプラスミド配列の存在もない)の投与によって促進され得る。更に、ある場合には、変異CFTR遺伝子の欠損若しくは不活性並びに、生物学的に機能的なCFTR分子のコーディング配列との置換が所望され得る。

本発明で使用されるコンストラクトには、当該コンストラクトの用途に応じていくつかの形がある。従って、コンストラクトにはベクター、転写カセット、発現カセット及びプラスミドが含まれる。好ましくは、転写及び翻訳開始領域(時として“プロモーター”とも呼ばれる)は、転写開始調節領域と翻訳されない5'側配列の翻訳開始調節領域即ちリボソームへのmRNAの結合及び翻訳開始に寄与する“リボソーム結合部位”が入っていることが望ましい。開始制御領域の転写及び翻訳機能要素は、同一の遺伝子から由来又はこれから入手可能であることが望ましい。ある具体例では、プロモーターはエンハンサーなどの配列の追加、又は必須でない及び／又は望ましくない配列の削除によって改変される。“入手可能”とは、対象DNAの転写の所望な特異性を提供するために、本来のプロモーターと類似しているDNA配列を有するプロモーターを意図している。これには、天然配列と合成配列、更には合成配列と天然配列の組合せによる配列が含まれる。

転写開始領域、即ちプロモーター要素については、対象DNA配列の所望のレベルの転写を与えることを条件に、どの領域を使われ得る。転写開始領域は、宿主細胞及び／又は転写されるべきDNA配列本来のもの若しくは同種のもの、又は宿主細胞及び／又は転写されるべきDNA配列にとって異物若しくは異種のも

のとし得る。宿主細胞にとって異物とは、転写開始領域を含むコンストラクトを挿入される宿主に転写開始領域がみつからないということを意味する。DNA配列にとって異物とは、対象DNA配列に通常は伴わない転写開始領域のことを意味する。転写開始のための効率のよいプロモーター要素には、SV40（シミアンウィルス40）初期プロモーター、RSV（ラウス肉腫ウィルス）プロモーター、アデノウィルスメジャー後期プロモーター、及びヒトCMV（サイトメガロウィルス）前初期1プロモーターが含まれる。

誘導プロモーターも、転写のタイミングを制御するのが望ましい本発明で有用である。このプロモーターの例には、β-インターフェロン遺伝子、熱ショック遺伝子、メタクロチオネイシン遺伝子由来或いはエクジソンリセプターをコードするものなど昆虫の遺伝子を含むステロイドホルモン反応性遺伝子由来のもの等が含まれる。このような誘導プロモーターは、インターフェロン又はグルココルチコイドなど外部刺激を利用した注入遺伝子の転写を調節するために用いることができる。真核プロモーター要素の編成はかなり柔軟性があるので、構成的要素と誘導要素との組合せを使用することもできる。2つ以上の誘導プロモーター要素の並列配置では、単一の誘導要素で達成できるペースライン上の誘導レベルと比べた場合に、達せられる転写ペースライン上の誘導レベルを上げ得る。

一般に、調節配列は遺伝子の転写開始の5'側に約1...5 kbまでのDNAを含むが、これよりはるかに小さくすることもできる。この調節配列は、部位特異的突然変異誘発により（クンケル（Kunkel）TA、1985、Proc. Natl. Acad. Sci., USA, 82, 4886-4892）、又は適当な制限部位がN末端コドン近くで見つかれば、連結反応（ライゲーション）によって都合のよいリンクアオリゴヌクレオチドを導入することにより、希望するタンパク質の最初のコドンに対応する位置で修飾され得る。理想的な具体例では、互換性のある制限部位を持つコーディング配列が、遺伝子のコドン#1に対応する位置で連結され得る。この置換物は、元のコーディング配列に完全に復き換えるようにして挿入され得、従って置換された配列は、その3'末端で遺伝子ターミネーター及びボリアデニル化シグナルと隣接する。

転写エンハンサー要素は、任意的には発現カセットに含まれ得る。転写エンハンサー要素とは、転写活性の基本的な調節因子であり、プロモーター要素による

転写を増大させるように作用でき、しかも一般に転写活性を増強するためにプロモーターに対して5'方向にしなくともよいDNA配列を意図している。特定の発現カセットで使用されるプロモーター及びエンハンサー要素の組合せは、特定作用を最大限發揮させる技術に精通している者によって選択することができる。様々なエンハンサー要素を、多様な組織や細胞型における所望レベルの注入遺伝子発現を実現するために用いることができる。例えば、ヒトCMV前初期プロモーター-エンハンサー要素を、*in vivo*で様々な組織において高レベルの注入遺伝子発現をもたらすために用いることができる。

多くの種からの多様な細胞型中で、連結された遺伝子に高レベルの転写をもたらす他のエンハンサー要素の例には、SV40及びRSV-LTRからのエンハンサーが含む。SV40及びRSV-LTRは、必須な構成成分である。これらは特異的作用を有する他のエンハンサーと組み合わせることもでき、特異的エンハンサーを単独で使用することもできる。従って、転写の特異的制御が所望されるときは、組織、発生段階又は細胞特異性様式でのみ活性な有効エンハンサー要素、例えば免疫グロブリン、インターロイキン-2(IL-2)及びβ-アグロビンエンハンサーが含まれる。組織、発生段階又は細胞に特異的なエンハンサーを使って、例えばBリンパ球やTリンパ球などの特定の細胞型、或いはミエロイド、赤血球前駆細胞中で注入遺伝子発現をもたらすことができる。或いは、高レベルの転写と組織特異性注入遺伝子転写とを得るために、ヒト癌細胞線維症腫瘍遺伝子コンダクタンス調節物質(CFTR)遺伝子由来のものなど組織特異性プロモーターを、きわめて活性が高く異種のエンハンサー要素、例えばSV40エンハンサーに融合することができる。更に、LCKのような組織特異性プロモーターの利用は、注入遺伝子転写をTリンパ球に向けることを可能にする。注入遺伝子の組織特異性転写は、標的組織以外の組織で注入遺伝子の転写が生じると有害な場合に、特に重要である。

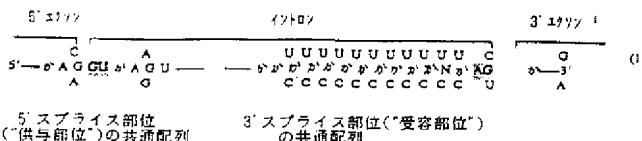
2つ以上のエンハンサー要素又はエンハンサー要素の組合せの縦列(タンデム)反復は、單一のコピーのエンハンサー要素の使用と比べて注入遺伝子発現を有意に増大し得る；従って、エンハンサー要素は発現カセットにおいて有用である。單一プロモーターに隣接する若しくはその内部にある、同一又は異なる供給源か

或いは、介在配列は翻訳終結コドン及び転写ターミネーターの3'側又はコードィング領域の内に配置し得る。イントロンは、介在配列との混成イントロン又はゲノムコーディング配列から取ったイントロンとすることができる。コーディング領域の3'側のイントロン、1 000 bp未満の5'イントロン、あるいは潜在スプライス部位を含むイントロンは、一定の条件下で *in vivo* でもたらされる注入遺伝子発現のレベルを実質的に低下し得る。しかし、イントロンを欠くベクターを用いると、予期せずして、注入遺伝子の高レベルの *in vivo* 発現を達成することができる。従って、*in vivo* トランسفекションでは、このようなベクターは特に関心がもたれる。

転写開始轉節領域の下流で且つその制御下には、1以上の宿主遺伝子型の変更及び宿主表現型の変更をもたらす対象核酸配列の挿入のための多量クローニング部位がある。都合のよいことには、多量クローニング部位は効率のよい方法で多彩な核酸配列に採用され得る。クローニング部位に挿入される核酸配列は、対象ポリペプチド例えは酵素をコードする全てのオープンリーディングフレームを持ち得る。ただし、そのコーディング配列が対象ポリペプチドをコードする場合に、適切なmRNA分子の生成を遮断する及び／又は讀ってスプライスされた若しくは異常なmRNA分子の生成を起こし得る潜在スプライス部位を欠くべきである。当該核酸配列はDNAとし得る；また、ゲノム配列に相補的な配列とし得、この場合、ゲノム配列は1以上のオープンリーディングフレーム、イントロン、非コード化リーダー配列、又は、相補的配列が転写、メッセンジャーRNAPロセッサング例えはスプライシング等／又は翻訳を障害するような他の配列とし得る。

ゲノムDNAへの転写カセットの組み込みの発生率は、精製レトロウイルス酵素例えはHIV-1インテグラーゼ酵素を脂質キアリーオDNA複合体へ組み込むことによって増加し得る。適当なフランギング配列は、核酸酸の5'及び3'末端に配置される。これらのフランギング配列が、HIV-1インテグラーゼの存在下において、宿主細胞ゲノムDNAへHIV-1 DNAの組み込みを仲介することは証明されている。或いは、ウィルス例えはエスピタイン-バールウィルスの非トランスフォーミング配列並びに、哺乳動物細胞において疊層DNAをエ

## RNAスプライシングで使用される5'及び3'スプライス部位に関する共通配列



ここに示した配列はRNA鎖についてのもの。イントロンの両端のはほとんど非変異のジヌクレオチドGU及びAGはあらかげしてある。

## 特表平7-502510 (8)

リボソームとして複製させるために十分と思われるori P及びEBNA-1のような配列を含むコンストラクトを使用することで、in vivoにおける外来核酸の発現の待機期間を、延長することができる(ブハンス(Buhans)ら、Cell (1986) 52:865)。

基本的に、採用される終結領域は、比較的交換可能のようなので都合のよいところとなる。終結領域は、対象となる目的核酸配列に固有のもの又は、別の供給源に由来するものとし得る。都合のよい終結領域が利用でき、遺伝子ターミネーターの3'末端及び、5'調節領域が得られる同一遺伝子からのポリアデニル化シゲナルを含む。mRNAを安定化させるために、好ましくは必要に応じて3'から2'0まで又はそれ以上のアデニル化残基が含まれ得る。或いは、異なる単数又は複数の遺伝子からのターミネーター及びポリアデニル化シゲナルを利用しても同じ様な結果が得られ得る。転写後のmRNAの安定性を調節する特定配列は適切に含まれ得る。例えば、特定のポリア配列(ウォロック(Valloch)ら、Cell (1981) 23:509)及びBグロビンmRNA要素はmRNA中の安定性を高めることができ、またmRNAに特定のAU富集配列は、mRNAの安定性を下げることができる(ショウ(Shyu)ら、Genes and Devel. (1989) 3:50)。更に、対象の遺伝子にとって短い半減期のmRNAが所望される場合には、3'非コード化領域中のAU領域は、mRNAの安定化のために用いられ得る。

### 遺伝子の距離及びベクターのコンストラクション

本発明で使用される核酸配列は、既知の供給源、例えば希望する遺伝子を含有する細胞からの核酸の単離により、標準的な技法を用いて得ることができる。同様に、遺伝子配列は、この分野で十分知られている標準的な方式のポリヌクレオチド合成を使って合成されることができる。例えばM. D. エッジ(Edge)、Nature (1981) 292:756；ナンバール(Nambair)ら、Science (1984) 223:1299；ジェイ(Jay)、アーネスト(Earnest)、J. Biol. Chem. (1984) 259:6311を参照。一般に、合成オリゴヌクレオチドは、エッジら(Nature、前記)及びダックワース(Duckworth)ら、Nucleic Acids Res (1981) 9:1691に記述されたホスホトリエスチル法、又はS. L. ポカージュ(Beaucage)とM. H. カルサー(Caruthers)、

Tet. Letts. (1981) 22:1859 及び M. D. マッティウッチ(Matteucci)とM. H. カルサー、J. Am. Chem. Soc. (1981) 103:3185 に記述されているホスホラミディト法で調製され、また市販の自動オリゴヌクレオチドシンセサイザーを使って調製されることもできる。遺伝子配列を、特定のアミノ酸配列のための適当なコドンを使って設計することができる。一般的に、目的とする宿主における発現のための好ましいコドンが選択される。標準的な方法で調製された重複するオリゴヌクレオチドから完全な配列が組み立てられ、完全なコーディング配列に組み立てられる。エッジ、Nature (1981) 292:756；ナンバールら、Science (1984) 223:1299；ジェイら、J. Biol. Chem. (1984) 259:6311などを参照。部分的CFTR cDNAクローンT 1.1、T 1.8-1、T 1.8-4、5及びC 1-1-1/5(リオルダン(Riordan)ら、Science (1989) 245:1066-1073)は、アメリカン・タイプ・カルチャー・コレクション(メリーランド州、ロックランド)から入手される。CFTRタンパク質及びその種々の変異体をコードする完全単離cDNAは欧洲特許出願第81301819.8号に開示されている。また、グッドフェロー(Goodfellow)、P. Nature (1989) 341:102-103；ロメンス(Rommens)ら、Science (1989) 245:1059-1054；ペアスレイ(Beardsley)ら、Sci. Am. (1989) 261:28-30も参照のこと。対象となるタンパク質の変異体又はアナログ(類似物)を作製することができるとされ得る。変異体又はアナログは、該タンパク質をコードする配列の一部を欠損することによって、配列を挿入することによって及び/又は該配列内で1以上上のヌクレオチドを置換することによって製造し得る。変異は、正常産生タンパク質の全身性副作用を排除又は減少するように、該タンパク質の產生に作用するものとすることができます。ヌクレオチド配列の改変技術例えば部位特異的突然変異誘発は、当業者にはよく知られている。例えば、サムブロックら、後出：DNA Cloning, I 及び II 卷、前出：Nucleic Acid Hybridization、後出を参照のこと。

脂質キャリアー核酸の調製に使用される核酸を得るために特に便利な方法は、組換え法を用いることである。即ち、標準的な制限酵素と手順を用いて、CFTR 遺伝子を運ぶプラスミドから該希望する遺伝子を切除することができる。部位特異的DNA切断(剪断)が、この分野で一般に理解されている条件下において適切な単数又は複数の制限酵素を使って処理することにより、実施される。その具

体的なやり方は、市販の制限酵素の製造業者から指定がある。ニューイングランド・バイオラボ(New England Biolabs)の製品カタログを参照。希望があれば、切断フラグメントのサイズ分離を、標準的な技法を用いてポリアクリラミドゲル又はアガロースゲル電気泳動によって実施し得る。サイズ分離に関する一般的な説明については、Methods in Enzymology (1980) 65:499-560を参照。

制限切断フラグメントは、標準的な技法を用いて、4つのデオキシヌクレオチドトリホスフェート(dNTP)存在下で、E. coli DNAポリメラーゼ(クレノウ)の大フラグメントで処理して平滑末端化され得る。クレノウフラグメントは、5'側1本鎖オーバーハングを埋めるが、4つのdNTPが存在する場合でも、はみ出た3'側1本鎖を破壊する。希望とあれば、オーバーハングの性質による限界内において、1種又は選択したdNTPを与えて、選択的修復を実施することができる。クレノウで処理した後に、混合物を、例えばフェノール/クロロフォルムで抽出し、エタノール沈殿することができる。適当な条件下でS1ヌクレオチド又はBAL-31を使って処理すると、どの1本鎖部分も加水分解される。

希望するタンパク質についてのコーディング配列が調製若しくは単離されたならば、それを適当なベクター又はレプレコンにクローン化することができる。当業者は、多数のクローンングベクターを知っている；適当なクローンングベクターの選択は、当業者がよく知っており、適当なクローンングベクターとして何をとるかは各自で選択できる。他の配列への連結反応(ライゲーション)は、その分野でよく知られている標準的な手順を使って行われる。例えば、2.0 mMトリス-HCl, pH 7.5, 1.0 mM MgCl<sub>2</sub>, 1.0 mM DTT, 3.3 μg/mg BSA, 1.0 mM~5.0 mM NaCl、並びに、4.0 μM ATP, 0.01~0.02 (Weiss)単位T4 DNAリガーゼを0°Cで(“付着末端”連結用)、又は1 mM ATP, 0.3~0.6 (Weiss)単位T4 DNAリガーゼを14°Cで(“平滑末端”連結用)で連結反応を実施することができる。分子間の“付着末端”連結反応は、通常、3.0~1.00 μg/mlの総DNA濃度(総末端濃度5~10.0 nM)で行われる。

核酸配列は、プロモーター、リボソーム結合部位、及び任意的なオペレーター

(ここではこれらをまとめて“制御”要素という)の制御下に置いて、コーディング配列が脂質キャリアー核酸によりトランスフォームされた宿主組織中でRNAに転写されるようになる。コーディング配列には、シグナルペプチド又はリーダー配列が入っていても、入っていないどちらでもよい。“プロモーター配列”は、細胞中でRNAポリメラーゼを結合することができ、また下流(3'方向)のコーディング配列の転写を開始できるDNA調節領域である。本発明物の説明にあたっては、プロモーター配列はコーディング配列の転写開始コドン(ATG)を3'末端に結合し、上流(5'方向)に広がってバックグラウンドよりも高く検出可能なレベルで転写を開始するのに必要な最小限の塩基又は要素を含むものとする。プロモーター配列内には、転写開始部位(ヌクレオチドS1によるマッピングでうまく定義される)、並びにRNAポリメラーゼの結合を担当するタンパク質結合領域(共有配列)がある。核酸“制御配列”又は“調節領域”とは、プロモーター配列、リボソーム結合部位、ポリアデニル化シゲナル、転写終結配列、上流調節領域、エンハンサー等をまとめて呼んだもので、これらは、まとまって宿主細胞におけるコーディング配列の転写及び翻訳をもたらす。

調節要素の選択は、トランスフォームされるべき宿主細胞及び用られた核酸調製物のタイプに依存する。従って、宿主細胞の内在性転写及び翻訳機構を使って、CFTR分子を発現する場合、発現をもたらす個々の宿主中で機能する制御要素が用いられる。哺乳動物細胞中で使用される幾つかのプロモーターは、この分野では知られており、例えばSV 40(シミアンウィルス40)初期プロモーター、RSV(ラウス肉腫ウィルス)プロモーター、アデノウィルスマージャー後期プロモーター、及びヒトCMV(サイトメガロウィルス)前初期1プロモーターがあるが、これらには限定されない。使用され得る他のプロモーターとしては、マウス乳癌ウィルス(MMTV、T7、T3等)由来のものが含まれる。本発明で特に有用なのは、RSVプロモーター及びCMVプロモーター、とりわけCMVのAD169株から得られる前初期プロモーターである。上記の配列に加えて、CFTR分子の発現を調節できる調節配列を、核酸コンストラクトに追加することが望ましいとされ得る。調節配列は当業者によく知られているもので、例えば、調節成分の存在など、化学的又は物理的刺激に反応して遺伝子の発現をオン又は

## 特表平7-502510 (9)

オフさせるものが含まれる。このようなプロモーターを使い、例えばインターフェロン又はグルコルチコイドなどの外部刺激を利用することで、注入遺伝子の発現を調節することができる。

プラスミドには、その他のタイプの調節要素も存在し得る。例えば、エンハンサー配列である。この種の調節要素としては、 $\beta$ -インターフェロン、熱ショック、メタクロチオネイン又はステロイドホルモン反応性遺伝子から得られるものがあり、これにはエクジソリセプター遺伝子など昆虫遺伝子が含まれる。真核プロモーター要素の編成はきわめて柔軟性があるので、構成的要素と誘導要素とを組み合わせて使用することもできる。2つ以上の誘導プロモーター要素の組合せは、単一の誘導要素で得られることができる転写ベースラインより上に誘導レベルを高くし得る。転写エンハンサー要素とは、プロモーター要素からの転写を増大させることができることのできる転写活性の主な調節因子であり、一般に転写活性を増強するためにプロモーターに対して $5'$ の方向になくともよいDNA配列のことである。

特定の核酸コンストラクトで使用されるプロモーター要素とエンハンサー要素との組合せは、特定の効果を最大にするための技術に熟練した者によって選択できる；異なるエンハンサー要素を使って、希望するレベルの注入遺伝子発現をもたらすことができる。例えば、高レベルの発現と、主として肺における該核酸の発現とを共に得るために、ヒト囊胞性線維症遺伝子型コンダクタンス調節物質(CFTR)遺伝子に由来するものなど組織特異的なプロモーターを、きわめて活性の高い異種のエンハンサー要素、例えばSV40エンハンサーに隣接して用いることができる。2つ以上の誘導プロモーター要素の組合せ、又はエンハンサー要素の組合せは、單一コピーの誘導要素の使用に比べて、転写を有意に増加する。單一プロモーターに隣接又はその内部にある同一又は異なる供給源からの異なる2種類のエンハンサー要素が使用され得る。特定の希望する効果又は発現レベルのためのエンハンサー要素の特定の組み合わせの評価は、当業者の知るところである。少なくとも一部はCMV Towne's及び／又はAD169株に由来するプロモーターエンハンサー要素は、高レベルの注入遺伝子発現をもたらすものとして特に興味のある。

コーディング配列を直接クローニングすることもできる。

### 脂質キャリアの調製

本発明で使用する脂質キャリアは、陽イオン性(正荷電)、陰イオン性(負荷電)及び中性の調製物を含む。しかし、陽イオン性脂質キャリアが、陽イオン性脂質キャリアとポリアニオンの核酸との間で密な電荷複合体(light charge complex)を作ることができるため特に好ましい。例えば、これは、噴霧力と肺気道環境の両方に耐えられ、しかもエアロゾル化したDNA：脂質キャリア複合体が肺に沈着した後で肺細胞のトランسفェクションを行うことのできる脂質キャリア-核酸複合体をもたらす。陽イオン性脂質キャリアは、機能形態のプラスミドDNA(フェルグナー(Felgner)ら、Proc.Natl.Acad.Sci.USA(1987)84:7413-7416)、mRNA(マロン(Malone)ら、Proc.Natl.Acad.Sci.USA(1989)86:6077-6081)、及び精製転写因子(デブスラ、J.Biol.Chem.(1980)255:10189-10192)の細胞内送達を仲介することができる。

部位特異的分子を用いて、脂質キャリアが特定タイプの細胞に向くように修正することによって、肺内及び肺外器官の特定細胞を標的とすることができる。そこで、特定の表面抗原と会合する細胞を標的とするために、特定リセプターに対する抗体又はリガンドを採用し得る。特定のリガンド又は抗体を、慣用の方法に従って脂質キャリアと結合させ得る。その方法は、部位特異的分子を脂質に結合させて脂質二重膜に組み込むか、あるいは二重膜に存在する脂質に連結基を提供して部位特異的成分の機能部位に連結するかのいずれかをとる。このような技術は当業者にはよく知られている。正確な肺内でのターゲティングは、a) エアロゾルか肺胞に若しくは気道の近位から遠位に優先的に向かうようにエアロゾル粒子の大きさを変えること、又は、b) 脂質キャリア表面にモノクローナル抗体を共有結合で結びつけ、それによって対応する細胞表面抗原を発現する肺細胞に指向させること、若しくは、特定の肺細胞のタイプに対して特定の親和性を有する特異的陽イオン性脂質を用いることによって達成されることがある。

リボソームを脂質キャリアとする様々な脂質キャリア-核酸複合体が、既知の方法で作製される。例えばストロービンガー(Straubinger)らのMethods of Imm

基本的に、終結領域は相対的に交換可能のようなので、採用される終結領域は都合のよいところとする。終結領域は、CFTR遺伝子に固有のものでも、別の供給源に由来するものでもよい。都合のよい終結領域が利用でき、遺伝子ターミネーターの $3'$ 末端及び、 $5'$ 側の調節領域を得た同一遺伝子からのポリアデニル化シグナルを含む。mRNAを安定化させるために、アデニル化残基を、できれば必要に応じて32 kb以上及び200 kbまで又はこれ以上で含み得る。或いは、CFTR遺伝子以外の单数又は複数の遺伝子からのターミネーター及びポリアデニル化シグナルを利用しても同じ様な結果が得られる。転写後mRNAの安定性を調節する特定配列を任意に含み得る。例えば、特定のガリA配列(ヴィオックラ、Cell(1981)23:509)及び $\beta$ ヘムオビンmRNA要素はmRNAの安定性を高めることができ。一方、mRNAに特定のAU富裕配列は、mRNAの安定性を低下することができる(シェーラ、Genes and Development(1989)3:60)。更に、mRNAの半減期が短いほうが好ましい場合には、 $3'$ 非コード化領域のAU領域を使ってmRNAを不安定にしてよい。

核酸コンストラクトには、選別のために配列としてネオマイシン耐性遺伝子、ジヒドロ葉酸レダクターゼ遺伝子及び／又は、異なる細胞成分を標的とするため、特に該核酸発現産物の分泌をもたらすために、組換えタンパク質を生成するためのシグナル配列を含み得る。様々なシグナル配列は全て用いられ得、これらは当業者によく知られ、例えば、該タンパク質の核局在化(?)をもたらすアミノ酸のペーシックな配列をコードし得る。

転写ベクターは、特定のコーディング配列が適切な調節配列とともにベクター内に位置するように構築され、制御配列に対するコーディング配列の位置及び方向は、コーディング配列が制御配列の“制御”下で転写されるようになる。この目的を達成するには、対象の特定タンパク質をコード化する配列を修飾することが望ましい。例えば、場合によっては、適当な方向で制御配列に接続し得るように配列を変更したり；あるいはリーディングフレームを維持する必要があり得る。制御配列及び他の調節配列は、ベクターに挿入する前にコーディング配列に連結され得る。或いは、既に制御配列及び制御配列の調節制御を有し、その制御下にあるリーディングフレーム内の適当な制限部位を含有する発現ベクターに、

urology(1983), Vol.101, pp.512-527を参照。“脂質キャリアー核酸複合体”とは、一般に、後述するように脂質キャリア調製物の表面に結合された前述の核酸配列を意味する。脂質キャリア調製物には、組込み、転写及び翻訳に必要な酵素、補因子など他の物質を含むことができる。更に、脂質キャリアー核酸複合体には、複合体を特定の細胞又は組織タイプに送達するためのターゲティング物質を含むこともできる。核酸を捕獲することを所望する場合には、ガラスチューブの壁上にリン脂質の薄膜を沈着し、次いで捕捉されるべき物質の溶液で水和してボルテックス処理することによって、核酸を含有するMLVを調製することができる。

核酸物質は、脂質キャリアを調製してボルテックス処理したばかりのMLV又はSLVの懸濁液に添加される。陽イオン性脂質を含有する脂質キャリアを用いるときには、乾燥脂質フィルムを適当な混合溶媒、例えば滅菌水又は等張緩衝液(例えば1.0 mMトリス／NaCl、又は5%デキストロース水溶液)に再懸滴し、音波処理してから、できあがった脂質キャリアをDNAと直接混合する。脂質キャリア及びDNAは、負に荷電したDNAが陽イオン性脂質キャリアに結合するので、きわめて安定した複合体を形成する。SUVは、DNAの大さな領域(2-25.0 kb)だけでなく、小型の核酸フラグメントと共に用いられる。

脂質キャリアー核酸複合体の調製にあたっては、脂質キャリアー核酸複合体の凝集形成を促し得る化合物を混合溶液からいっさい排除するよう注意しなければならない。エアロゾル投与においては、大型粒子は一般に噴霧器(ネブライザー)ではエアロゾル化されず、またとえエアロゾル化されたとしても、気道の大きな部分よりも奥まで浸透するには大き過ぎる。脂質キャリアー核酸複合体の凝集は、脂質キャリアに対するDNAの比を調整し、溶液中のDNA：脂質キャリア複合体の全体的濃度を最低に抑え(通常は5 mg DNA／8 ml未満)、またEDTAのようなキレート剤や有機溶媒など大凝集体形成を促進する傾向のあるものを避けることによって妨害される。好適な分散剤は、水、デキストロース／水、又はイオン強度が小さい又はない溶液である。更に、宿主哺乳動物の肺における沈着を最低限にするよう容量を調節しなければならないが、同時に溶液が濃縮されすぎて凝集体が生じないようにも注意しなければならない。

従って、脂質キャリア及び脂質キャリアー核酸複合体の濃度の選択は、2段階

で行われる。第1段階では、構成要素を結合するとき又は噴霧化段階で行われる混合物の大きな攪拌中に凝集を生じないような、脂質キャリア及び脂質キャリアー核酸複合体の濃度を同定することである。第2段階では、第1段階で候補となったもの（すなわち凝集を起こさないもの）の中から、肺の標的細胞において対象遺伝子の転写及び発現を高レベルでもたらすような複合体を同定することである。発現のレベル及び組換え遺伝子の発現が起こる細胞のタイプは、mRNAレベル及び／又はポリペプチドもしくはタンパク質のレベルで決定され得る。遺伝子産物は、組織におけるその生物活性を測定することによって定量され得る。例えば、酵素活性はバイオアッセイによって、あるいは免疫染色法例えば発現カセットに存在する遺伝子産物又はレポート遺伝子産物を特異的に認識する抗体を用いたプロービングにより、トランسفェクトされた細胞における遺伝子産物を同定することによって測定されることができる。

1例として、リポーター遺伝子CAT（クロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼをコードする）を発現カセットに挿入し、対象脂質キャリア組成をそれぞれ評価するのに用いることができる。DNA：脂質キャリア複合体は、滅菌水など、それ自体がDNA：脂質キャリア複合体の凝集を招くことのない溶液中で混合しなければならない。発現カセット（DNA）を、脂質キャリアと一緒に混ぜて、例えば4：1から1：10（DNAマイクログラム対陽イオン性脂質ナノモル）の範囲の複数の異なる比について試験する。その結果から、どのような比であるとDNA：脂質キャリア複合体の凝集が生じるか、従ってin vivoに利用できなかいか、またエアロゾル化するのに適した形のまま残っているのはどの複合体かといった情報が得られる。凝集を生じない比について、動物モデルで試験して、どのDNA：脂質キャリア比がin vivoでの注入遺伝子発現の最も高いレベルになるかを確かめる。例えば、DOTMA／DOPE、DDAB：コレステロールについてのSUVに関する最適DNA：脂質キャリア比は1：1又は1：2であり、エチルホスファチルコリン（E-P-C及びエチルジミリストルホスファチルコリン（E-DMPC）である。

#### エアロゾル化投与

与することができる。このような方法をとる場合の条件は、必要な用量を投与しても刺激がありすぎず、また、肺胞への沈着を可能にするように、直径が0.5 μmから約5 μmの範囲の粒子が粒子全体の中でかなりの数を占めるような脂質キャリアー核酸複合体を選ぶことである。近位気道への送達には、平均粒子サイズは、これより大きくなる。例えば、これに適した粒子の平均直徑は一般に約1.5 μm未満、好ましくは約4 μm以上あり、最も好ましいのは約5～約10 μmの範囲である。

肺胞送達に有用な噴霧器の例としては、Acorn I噴霧器、及びRespirgard II（商標名）噴霧器システムが挙げられる。いずれもマルケスト・メディカル・プロダクツ（Marquest Medical Products, Inc.）社（イングリッド、コロラド州）から入手できる。その他、本発明と共に使用できる市販の噴霧器としては、マリンクロット（Mallinckrodt）社（メリーランドハイツ、ミズーリ州）のUltivent（商標名）噴霧器、Wright（商標名）噴霧器（B.M.ライト、Lancet (1958) 3:24-25）、及びDeVilbiss噴霧器（マーサー（Mercer）ら：Am. Ind. Hyg. Assoc. J. (1968) 29:66-78、T.T.マーサー、Chesl (1981) 80:6(Suppl)819-817）が含まれる。喘息治療に普通に用いられている噴霧器も、気道送達に有用である。この種の噴霧器も市販されている。当業者は、噴霧器から生成された粒子の平均粒子サイズを測定することによって、特定の場合にどの噴霧器が有用かを決定することができ、それによって、例えば、7段階マーサー・カスケードインパクター（イントックス・プロダクツ（Intox Products））、アルバカーキ、ニューメキシコ州）を使う。脂質キャリアー核酸複合体を出し、適当な波長で最適密度を評価し、標準曲線と比較することによって、インパクターブレートから複合体の濃度を調べることができる。結果は普通、質量メジャーアン空気力学的径半幾何標準偏差で表す（ラーブ：J. Aerosol Sci. (1971) 2:289-303）。

使用する脂質キャリアの量は、DNA又は複合体が肺に入った後に細胞の十分なトランسفェクションをもたらし、トランسفェクションされた細胞中に治療効果レベルの転写及び／又は翻訳をもたらすのに十分な量とする。転写及び／又は翻訳の治療効果レベルとは、脂質キャリアー核酸複合体を宿主哺乳動物の肺、

哺乳動物宿主は、遺伝的疾患の症状を持つものであればどの哺乳類でもよい。従って、適用対象は家畜、飼育動物例えはウシ、ヒツジ、ブタでも、靈長類とりわけヒトでも利用できる。本発明の方法では、非組込みの治療用プラスミドを、脂質キャリア特に陽イオン性脂質キャリア、より特別にはヒトに使用する場合、あるいは反復投与する場合には生分解性脂質キャリアに複合させて、哺乳動物宿主に導入してin vivoでのトランسفォーメーションがもたらされる。哺乳動物宿主の導入のために、全ての生理的許容媒体が、DNA又は脂質キャリアの投与に用いられ得、例えば脱イオン水、5%デキストロース水溶液などがある。配合においては、他の成分例えは安定剤、生物致死剤等が含まれ得、先に概略を述べた基準、即ち複合体の凝集を生じないという基準を満たすことを条件とする。上に列挙した様々な成分は、文献に具体例がいろいろあるので、ここでは詳しく述べる必要はない。

ヒト又は他の靈長類におけるエアロゾル化送達において、マウスピース又はフェイスマスク等を通してエアロゾルを送る医療用噴霧器システムでエアロゾルを発生させ、哺乳動物宿主はそこから肺にエアロゾルを吸い込むことができる。目下知られている噴霧器は様々あり、本発明の方法でも使用できる。例えば、ボイアースキ（Bojarski）ら、米国特許第4,268,460号；レーンベック（Lehmbeck）ら、米国特許第4,253,468号、米国特許第4,046,146号；ハブスタッド（Havstad）ら、米国特許第3,826,255号；ナイト（Knight）ら、米国特許第4,649,811号；ボルドニ（Bordoni）ら、米国特許第4,510,829号を参照。どの噴霧器システムを選ぶかは、肺胞送達が望ましいか気道送達（すなわち気管、第1、第2又は第3気管支等）が望ましいかに依存している。

核酸の肺胞への効率的な送達を確実にするやり方は、十分に小さな粒子、例えば平均粒子直徑が5.0ミクロン（μm）未満の粒子を生み出す噴霧器を選ぶ。平均粒子直徑が約0.2～約4.0 μmの粒子がなお好ましく、更に最も好ましいのは、粒子の平均直徑が約0.2～約2 μmのものである。それというのも、大きい粒子（約5 μm）は一般に近位気道又は鼻咽頭に沈着するからである。かなり肺胞に沈着させるために粒子の平均直徑を小さくするもう1つの方法として、平均直徑がより大きい粒子を、脂質キャリアー核酸調製物をかなり高い用量で投

特に肺胞又は気道に投与した後に宿主哺乳動物の疾患を予防、治療又は軽減するに十分な量のことである。従って、エアロゾル化された脂質キャリアー核酸調製物の「有効量」とは、症状を緩和もしくは軽減する、症状の悪化を阻止する、症状の発現を予防するなど、治療を果たすために十分な量のことである。有効量を含む本組成物の投与量は、本開示を参考に、適当な対照物を使ってルーチンの治験を行い、通常の方法で決定できる。適当な処理群を対照群と比較すれば、特定の投与量が特定の症状の予防又は軽減において有効か否かがわかるだろう。適切な用量については、以下で更に議論する。肺胞に送達された脂質キャリアー核酸複合体の実際の量を直接測定する方法はないが、気管支肺胞洗浄（BAL）を利用して大気道及び気管支に沈着したタンパク質のクリアランスを可能にするため、通常は吸入の1.8～2.4時間後に、全ての発現した及び分離されたタンパク質の肺胞濃度を間接的に測定することができる。

哺乳動物宿主に送達された核酸の総量は、多數の要因によって左右され、これには、エアロゾル化物の総量、噴霧器のタイプ、粒子の大きさ、哺乳動物宿主の呼吸パターン、肺疾患の重症度、エアロゾル化溶液中の脂質キャリアー核酸複合体の濃度と平均直徑、並びに吸入治療実施期間が含まれる。従って、気道中の測定された発現タンパク質の量は、エアロゾル中に存在する核酸の量から発現すると予想されるものよりもかなり少なくなることがある。なぜならば、該複合体のかなりの部分が投与対象により呼気されるか、噴霧装置の内部表面に捕捉されることがあるからである。例えば、噴霧器に入れた脂質キャリアー核酸の用量のはば3分の1は、吸入が完了した後に噴霧器及び付随チューブ内に残っている。これは用量、吸入時間、使用する噴霧器のタイプに関係ない。更に、残留物を再懸滴して再度投与しても、投与対象に送達される用量は有意には増加せず、約3分の1は噴霧器中に残留する。更に、コード化されたタンパク質の発現効率は、使用される発現系によって大きく異なる。

上述した交絡因子があるとはいうものの、当業者は、有効なプロトコルを、特にエアロゾルの粒子の大きさが最適である場合には、容易に作成することができる。特に、噴霧器の推定効率に基づいて判断すると、有効送達用量は通常、約1～約5.0 mg／治療1回の範囲内になるが、投与対象や希望する結果によって

はこれより多くても少なくても有効なことがある。一般に、重症例を治療するときにはより高い用量で投与するのが望ましい。一般に、核酸は宿主細胞ゲノムに組み込まれないので、必要とあれば、目指す結果に依存した目的に応じて治療を繰り返すことができる。治療を繰り返す場合には、哺乳動物宿主をモニターして、投与に対する副作用的な免疫応答が生じていないかを確認する。治療の頻度は、多くの要因例えは投与あたりの脂質キャリアー核酸複合体の量、更には投与対象の健康状態や既往歴によって決まる。ここで投与量に関連して“脂質キャリアー核酸エアロゾル”という場合には、噴霧器中に入れられてエアロゾル化される脂質キャリアー核酸複合体の量のことをいう。複合体の“噴霧された量”又は“エアロゾル化された量”とは、エアロゾルとして装置から実際に出された量のことであり、即ち、装置に入れられた量から、投与セッション終了時点でレザーバー及び装置内側表面に残留している量を差し引いたものである。

気管支炎や肺炎など肺感染症を治療するために、連続して約4～約21日あるいはそれ以上にわたって、毎日1回以上投与を行う必要があるのが普通である。治療は通常、感染が消えるにつれて肺の新たな領域が核酸の浸透及び沈着を受けやすくなるので、毎日連続して行う。治療がうまくいっているかどうかをモニターし、従来からの臨床基準を評価して投与計画を変更することができる。例えは、X線写真における浸潤の消失、動脈血PO<sub>2</sub>の改善（例えは>7.0 mmHg）、呼吸困難の減少、呼吸数、熱などの基準である。囊胞性線維症など遺伝疾患の治療のために、脂質キャリアー核酸複合体を週に1回から1～数カ月毎の定期的な間隔で、危険な状態にある宿主の気道細胞中で正常CFTRタンパク質と置換するために投与する。というのも、これらの細胞は代謝回転を行っているからである。CFTR遺伝子を適当な肺幹細胞に安定してトランسفェクトすることも可能であり得、その後、一生治療を続ける必要なしに正常な気道細胞源を提供し続けることができる。遺伝子療法の潜在的な治療効果は、注入遺伝子が発現している遺伝子導入の宿主哺乳動物の生存率における遺伝子発現の効果を明らかにすることによって測定されることができる。有意量の注入遺伝子産物の產生は、関連する宿主の生存率を大いに延長し、生活の質を改良するだろう。

ポリペプチド／タンパク質、あるいはmRNA自身の発現によって宿主における

生化学的表現型に変化が生じる場合には、新たな表現型の存在又は古い表現型の不在が評価され得る；例えは、宿主細胞のトランスフォーメーションの結果として、不十分な量で以前に產生されていた既存の所望の産物の产生が増強され得、又はアンチセンス、リボサイム又は同時抑制技術を用いて、望ましくない遺伝子産物の減少若しくは抑制さえも起こり得る。減少又は抑制の場合には、遺伝子産物の減少や消失が判定され得る。

治療の潜在的な毒性については、目に見える行動によって、また適宜、生検標本の分析によって評価し得る。従って、活動レベルの変化、飲食パターンの変化などのジストレスを示す行動を、また生検標本では壞死、水腫又は炎症をモニターすることができる。

本発明の組成物は、1ないし複数の手順で使うことができる。キットには、裸のDNA及び脂質キャリアに複合させたDNAのいずれかとしてDNAを通常含む。更に、提供されたDNAと複合させるための脂質キャリアが、別の容器で提供される。DNA又は脂質キャリア／DNA複合体は使用前に希釈され得る濃縮物として存在し得、又は使用濃度で提供され得ることもあり、この場合には1回ないし複数回の投与分のバイアルが含まれ得る。便宜のために、1回投与量を噴霧器で使用するのに適した滅菌容器に入れて提供され得、こうすると、医師又は獣医はその容器を噴霧器に直接用い得る。この場合、容器には希望する量及び濃度の薬剤を入れておく。従ってキットには、適当な比率の量のDNA又はDNA／脂質キャリア複合体と、任意に適当な希釈液や混合液が入る複数の容器を有し得る。直接使用のための配合物が容器に入っている場合には、この方法において他に使用すべき試薬はない。

#### 全身性投与

5'末端でプロモーター及び調節配列に構成し3'末端でターミネーター及び調節配列に接続している組み換えコーディング配列は、宿主細胞への発現プラスミドのみの導入の後に、宿主細胞中の直接的DNA取込みにおける使用に好適なクローニングプラスミド（例えはpUC18、pSP72）へ導入され得る。核酸コンストラクトは、またキャリア例えは脂質キャリア、特に陽イオン性脂質キ

アリアと複合化され得る。脂質キャリアは種々の陽イオン性脂質から製造されることができ、DOTAP、DOTMA、DDAB、L-PE等が含まれる。陽イオン性脂質例えは、“リボフェクチン”として知られる[N(1-(2,3-ジオレオキシ)プロピル)-N,N,N-トリエチルアンモニウム]クロライド(DOTMA)、ジメチルジオクタデシルアンモニウムプロマイド(DDAB)、1,2-ジオレオキシ-3-(トリメチルアンモニオ)プロパン(DOTAP)又はリシンホスファチジルエタノールアミン(L-PE)と、第2脂質例えはジステアロイルホスファチジルエタノールアミン(DOPE)又はコレステロール(Chol)とを含有する脂質キャリアは、特に対象となる。DOTMA合成はフェルナー(Felgner)ら、Proc. Natl. Acad. Sci., USA., (1987) 84:7413-7417に記載されている。DOTAP合成はスタマタトス(Stamatatos)ら、Biochemistry (1988) 27:8017に記載されている。DOTMA:DOPE脂質キャリアは例えはBRL社から購入できる。DOTAP:DOPE脂質キャリアはベーリングラー・マンハイム社から購入できる。コレステロール及びDDABはシグマ社から市販されている。DOPEはアバンチ・ポーラー・リビド(Avanti Polar Lipids)社から市販されている。DDAB:DOPEはプロメガ社から購入できる。生分解性陽イオン性兩親媒物はまた、ポリアニオン性DNAと安定した複合体を形成することが証明されている。

陽イオン性リポソームが、核酸を広い範囲の種々の培養細胞に送達することによって、注入遺伝子又はmRNAの高レベルの細胞性発現を仲介することができることが証明されている。特定陽イオン性脂質の使用は、in vivo送達のための特殊な利点を確立できる。例えは、DOTAP含有リポソームの静脈注入は、肺に対する初期の注入遺伝子発現を他のとすることができる。その上、DOTAP、E-PC及びE-DPMCはL-PE及びCEBAと同様に、細胞によって十分に代謝され排出されるが、DOPMAは細胞によって十分に代謝されない。従って、DOTAP、E-PE、E-DPMAC及びL-PEは、哺乳宿主への反復注入に適しているが、DOTMAは、そうではない。更に、陽イオン性脂質と第2脂質とを複合化することは、まず、コレステロール又はDOPEがin vivoで注入遺伝子発現を最大にすることができる。例えは、DOPEの代わりにステロ

イド例えはコレステロールと、DOTAP、E-PC、E-DPMC、DOTM A若しくはDDABとの混合は、実質的にin vivoにおける注入遺伝子の発現を増加する。

投与の経路及び投与の部位に依存して、特定の細胞及び組織が標的にされ得る。例えは、血流の方向で注入部位に最も近い組織のトランスフェクションは、如何なる特殊な標的化もなくトランスフェクトされ得る。特定の構造イオン性脂質は、全身性注入の後、in vivoで特定の細胞型に陽イオン性脂質キャリアを送らせることが可能である。更に、所望するならば、脂質キャリアは部位指向性分子(site-directing molecules)を用いて特定の型の細胞へ脂質キャリアを指向するように改変され得る。従って、特定のリセプターに対する抗体又はリガンドが、特定の表面タンパク質と結合された標的細胞と共に用いられ得る。例えはAIDSウイルスを用いた場合、AIDSウイルスはCD4表面タンパク質を有する細胞にまず指向する。脂質キャリアの表面に結合された抗CD4抗体を担持することによって、該脂質キャリアはTヘルパー細胞にまず指向する。特定リガンド又は抗体は、脂質二重膜への吸込みのために部位指向性分子を脂質に結合することによって、又は部位指向性成分の機能性部位(functionality)を連結するために該二重膜に存在する脂質上の連結基を提供することによって、慣用の方法により脂質キャリアに結合され得る。このような技術は当業者にはよく知られている。リガンド指向性DNA-オリカチオン複合体が、静脈注入後に肝臓の肝細胞へトランスフェクトすることがわかっている；この手段によって他の細胞型又は組織型をトランスフェクトする能力は、証明されていない。非陽イオン性脂質キャリア、特にpH感受性リポソームは、in vivo遺伝子治療のための他の魅力的な手段の可能性を提供する。しかし、陽イオン性リポソームに比べて、pH感受性リポソームは、DNAの被包化及び細胞内でのDNAの送達において効率が劣り、血清の存在下で不活化し得るので、静脈内における使用が制限される。

予期せぬことに、注入されたリポソーム脂質組成物又は脂質キャリアの平均直径（リポソームのような粒形状の場合）は、in vivoでもたらされた注入遺伝子のレベルに劇的に作用することができる。従って、リポソーム脂質組成物は一般に、非陽イオン性脂質に対する陽イオン性脂質のモル比が50%の組成物である

## 特表平7-502510 (12)

が、5～100%の範囲を採り得る。脂質キャリアの直径は、概ね100nm～10μmの範囲内とする。陽イオン性脂質キャリアーDNA複合体は脂質キャリアが100nmから数μmの範囲である場合には、哺乳動物宿主への全身性導入後に、有意なレベルの注入遺伝子発現をもたらすことができる。

500nmを越える脂質キャリアの使用（言い換えれば多重ラメラ小胞（MLV）又は大単ラメラ小胞（LUV））は、小単ラメラ小胞（SUV）と比較した場合、ある場合には、哺乳宿主において産成される注入遺伝子の発現のレベルを有意に増加することができる。MLV及びLUVは乾燥脂質フィルムに水性物質を添加した後に、音波粉碎よりもむしろボルチックス処理によって製造される。所望するならば、得られた脂質キャリアを、決まったサイズのポリカーボネート膜を通して高圧下で押し出して、より均一なサイズ分布に達することができる。

また予期せぬことに、特定の脂質キャリア対核酸比の使用が必須であり；用いられる比が注入遺伝子がin vivoで発現するか否か及びそのレベルを規定し、最適化するために必要であり、これは種々のコンストラクトの性質、脂質キャリアのサイズ及び脂質組成物並びに、MLVかSUVか、投与の経路及び宿主哺乳動物を含む種々の因子に依存する。例えば、リポーター遺伝子であるCAT（クロラムフェニコールアセチルトランスクレオマー）を用いれば、約1:1(0.5:1から2:1の範囲)のDNA対脂質キャリア比( $\mu$ g DNA対nmolの陽イオン性脂質)は、腹腔投与後の全ての器官におけるマウスで最も高い遺伝子発現をもたらし、約1:4比(2:1から1:7の範囲)は、静脈投与後の全ての器官における最も高いレベルの遺伝子発現をもたらす。最適条件を用いて広範な組織での高いレベルの注入遺伝子発現の達成に加えて、肺、脾臓、リンパ節及び骨髓に存在する全ての細胞の大部分は、心臓に存在する全ての内皮細胞の大部分と同様に、in vivoでトランスフェクトされる。

DNA:脂質キャリア比は、注入遺伝子が該複合体の全身性投与後の哺乳宿主で発現するか否か、及びそのレベルを決定する。いくつかの因子がDNA:脂質キャリア比を最適化するために重要である。従って、特定のDNA:脂質キャリア比が、用いられた異なる脂質キャリアサイズ毎と同様に、用いられた陽イオン性脂質のタイプ毎に必要である。用いられた脂質キャリア組成物毎に、最適化す

異的な結合部位を含み且つこれを吸収することができる細胞表面リセプターを用いて、伝統的リセプター仲介エンドサイトシスによって細胞に取り込まれる（図7参照）。従って、試薬例えはサイトカイン、成長因子、他の可溶性タンパク質及び特定の薬剤を用いると、選択的にこれらの陽イオン結合リセプターをアップ又はダウンレギュレートすることが可能になる。適当な試薬によるアップ又はダウンレギュレーションの速度は、特定細胞のin vivoにおけるトランスフェクションのレベルの上げ下げの選択を可能にする。更に驚くべきことに、裸のDNAに対する細胞表面リセプターは、哺乳動物宿主内の遺伝子導入発現における標的細胞特異性を、調節及び提供を共にするために用いられることがある。

プラスミドDNAに複合された、単及び多重ラメラ脂質キャリアのいずれかであるDOTMA脂質キャリアと、種々の細胞型（例えはC V-1サル腎臓細胞、U 93-7ヒト骨髄単球白血病細胞、K 562、MEL（マウス赤芽球白血病細胞）、ラット肺胞マクロファージ及び肺胞II型細胞）との最もよく起こる相互作用は、脂質キャリア付着及び吸収によるものである。この相互作用は、リセプター仲介エンドサイトシスのよく研究されている例には共通している。陽イオン性脂質キャリア:DNA複合体に接触するような全ての細胞が、形質膜に結合した後の複合体を攝取する。これらの細胞型の全てが、同一の伝統的リセプター仲介エンドサイトシス的な吸収経路を証明している。

哺乳動物宿主は、全ての動物、特に遺伝子関連疾患の症状を有する動物である。従って、適用対象は、家畜、飼育動物例えはウシ、ヒツジ、ブタでも、霊長類特にヒトでも使用される。哺乳動物宿主は妊娠され得、遺伝子関連治療の意図されたレシピエントは、妊娠したメス及び胎児のいずれか又は両方とし得る。本発明の方法では、in vivoトランスフェクションは、治療用転写又は発現ベクターを哺乳動物宿主へ、裸のDNA又は脂質キャリア特に陽イオン性脂質キャリアと複合されたDNAを導入することによって得られる。コンストラクトは、注入遺伝子の安定な維持又は注入遺伝子のエピソーム発現のために、宿主細胞ゲノムへ組み込むために提供され得る。哺乳動物宿主への導入はいくつかの経路全てによってされ得、これには、静脈又は腹腔注入、気管内の、肺内的、腸管外的、動脈内的、筋肉内的等が含まれる。治療用発現ベクターの循環体液への導入が特

るため、DNAは、DNA:脂質キャリア複合体の凝集をもたらす比を決定するために、4:1から1:10( $\mu$ gのDNA対nmolの陽イオン性脂質)の範囲となる。複数の異なる率で脂質キャリアと共に混合されるべきである。凝集をもたらす比は、in vivoでは用いることができない。凝集をもたらさない比は、in vivoでの最も高い注入遺伝子の発現レベルを確保するDNA:脂質キャリア比を決定するために、動物モデルにおいて試験される。例えば、DOTMA/DOP E、DDAB/DOP E、DOTAP/DOP E、DOTAP/Chol、LPE:CEBA、DDAB:Chol、LPE:DOP E及びE-PC/CholにおけるSUVの最適DNA:脂質キャリア比は、各々、1:4、1:3、（全ての比でかなり低い活性）、1:6、1:1、1:5、2:1及び2:1である。DNA:脂質キャリア複合体は適当な生理学的溶液に作製されなければならない。DNA:脂質キャリア複合体は、それ自身DNA:脂質キャリア複合体の凝集を誘導しない生理溶液（約2.0ミリモル）に混合される。溶液は、水又は正常の生理塩水中5%のデキストロースを含む。

ベクター自身のコンストラクトも、またエマルジョン化投与若しくは全身性投与後に注入遺伝子のin vivoの高いレベルをもたらすために重要である。最適には、ベクターは、イントロンを欠く又は異所のスプライシングとならない抜退された5'イントロンを含む。更に、強力なプロモーター-エンハンサー要素例えはHCMVのAD169株又は例えはSV40又はHCMVIEI遺伝子からの異種エンハンサーを弱いプロモーター例えはCFTR遺伝子へ付加することは、注入遺伝子の高いレベルのin vivo発現を確保する。好適に構築されたベクターを用いると、高レベルのin vivo発現は、ベクターのみの全身性投与後に、又はより効率的には陽イオン性脂質キャリアとの複合化された場合に得られ得る。更に、異種のエンハンサーとCFTRプロモーターとの使用は、CFTR遺伝子発現の内因性パターンに近づいた組織及び細胞型特異的様式で、有意な注入遺伝子発現をもたらすために用いられることがある。

陽イオン性脂質キャリアの細胞表面リセプターは、哺乳動物宿主における注入遺伝子発現の標的細胞特異性を、調節及び提供を共にするために用いられることがある。陽イオン性脂質キャリア:DNA複合体は、カチオン分子に対して特

に対象となる。従って、静脈投与及び気管内投与は、このような投与経路の後に広く分散し得るのみ、特に対象となる。全て生理学的に許容可能な媒体がDNA又は脂質キャリアの投与のために用いられ得、これには、例えは脱イオン水、生理塩水、リン酸緩衝液、5%デキストロース水溶液等が含まれ、投与経路に依存する。他の成分がこの配合に含まれ得、例えは緩衝液、安定剤、殺生物剤等である。これらの成分は、文献に広範な例示が認められ、特にここでの説明の必要はない。

用いられる脂質キャリアの量は、DNA又は複合物が血液への侵入後、種々の組織への適当な散布がもたらされるため、及びトランスフェクトされた組織における治療的なレベルの発現をもたらすために、十分なものとする。治療レベルの発現は、宿主哺乳類の疾患を処置又は緩和するために十分な量の発現である。更に、用いられるプラスミドDNA発現ベクターの量は、in vivoにおける複数の組織での有意なレベルの注入遺伝子発現をもたらすために十分なものとしなければならず、例えは1mgの発現プラスミドのみは、マウスへ注入され、多数の組織においてCAT遺伝子の高レベル発現を達成する。他のDNA配列例えはアデノウィルスVA遺伝子は、投与媒体に含有されることができ、対象遺伝子と共にトランスフェクトされることができる。アデノウィルスVA遺伝子をコードする遺伝子の存在は、プラスミドから転写されたmRNAの翻訳を有意に促進し得る。

組み換え遺伝子の発現のレベル及び組織は、mRNAレベルで及び/又はオリベプチド若しくはタンパク質のレベルで測定され得る。遺伝子産物は、組織における生物活性を測定することによって定量され得る。例えは、酵素活性は、生物学的アッセイ又は、免疫染色技術例えは該遺伝子産物若しくは発現カセットに存在するリセプター遺伝子産物を特異的に認識する抗体を用いたプローピング（約り上げ）によってトランスフェクトされた細胞中の遺伝子産物を同定することによって、測定されることがある。或いは、該遺伝子産物の潜在的治療効果は、例えは対象DNA配列がGM-CSFをコードする場合には、GM-CSF注入遺伝子を発現する致死量被曝動物の生き残りにおける遺伝子発現の効果を測定することによって、測定することができる。注入遺伝子産物の有意量の生成は、こ

## 特表平7-502510 (13)

れらのマウスの生き残りを実質的に延長する。

ポリペプチド／タンパク質の発現又はmRNA自身さえも、宿主における変化した生化学的表現型を提供する場合、新しい表現型の出現又は古い表現型の損失を評価し得る；例えば宿主細胞のトランフェクションの結果として、以前に不十分な量で生成されていた既存の所望産物の生成が増進され得、又は、アンチセンス、リボザイム又は共同抑制技術を用いて非所望遺伝子産物の減少又は異なる抑制が起こり得る；抑制の場合では、遺伝子産物の減少が測定され得る。普通、治療カセットは、宿主ゲノムへ組み込まれない。必要であれば、治療は、達成される結果に依存した目的に応じて、繰り返されることができる。治療が繰り返される場合、哺乳動物宿主は治療に対する不利な免疫応答がないことを確保するためにモニターされる。

本組成物は、1以上の複数の手法における使用に提供されることができる。キットには、裸のDNA及び脂質キャリアに複合されたDNAのいずれかとしてのDNAを通常含む。更に、提供されたDNAと複合させるための脂質キャリアが、別容器で提供される。直接注入及び脂質キャリアとの複合のいずれかのためのDNA又は脂質キャリア／DNA複合体は、使用前に更に希釈され得る濃縮物として存在し得、又は使用濃度で提供され得るが、この場合には1回以上の投与分のバイアルが含まれ得る。都合上、医師又は獣医師がシリジングを直接用い得るよう、唯一投与量がシリジングで提供され得、これは滅菌容器中に含まれている。ここで、該シリジングは所望の量及び濃度の試薬が入っている。従ってキットには、適正な比率の量のDNA又はDNA／脂質キャリア複合物を含む複数のシリジングが入っている。該シリジングが直接使用のための配合を含む場合、通常、本方法による使用の際に他の使用試薬を必要としない。

本発明は、多くの疾患のin vivo治療及び／又は緩和に使用される。遺伝子のin vivo置換は例えば相同組み換え又は異常な遺伝子の初期ノックアウト及び次の所望注入遺伝子との置換の技術によって達成されることができる。

### 用途

本発明の用途を以下に挙げるが、これに限定されるものではない。本発明は、

CFの複数器官系症状発現の予防及び／又は治療のために、肺へ及び適当な肺外組織へ薬物を直接的に送達するのに特に有用である。特に、肺、肝臓、脾臍及び腸を含む組織におけるCFの疾患の症状発現の防止、治療及び治療に有効である。

囊胞性纖維症の治療のために、機能的CFTR遺伝子又は野性型CFTR活性を有する分子をコードする核酸配列が投与される。該遺伝子は、この不全の防止及び／又は治療の両方のために、予防的に、また、該疾患の臨床発現に対応して、投与されることができる。本発明は、また肺を経た全身性循環への物質の送達において使用される。生成されるCFTRの量は、投与される量、投与の頻度及び期間、注入遺伝子の直接転写のために用いられるプロモーター及びエンハンサー要素の長さ、並びに、用いられる脂質キャリアの効率及び標的特異性の変更によって制御されることができる。

本発明の方法は、アンチセンス治療でも利用できる。即ち、欠陥若しくは変異体CFTR遺伝子の相補的配列に特異的にハイブリッド可能なオリゴヌクレオチドを送り込み、それによってこれらの配列の転写及び／又は翻訳を阻止する。従って、特定の疾患の進行に必要なタンパク質をコードするDNA又はRNAを標的とし、その疾患の進行を妨げることができる。アンチセンス治療及びそこで有用なオリゴヌクレオチドについては、E. ウルマン(Uhlmann)及びA. ペイマン(Peyman)、Chem. Rev. (1990) 90:543-584を参照。

以下に、実施例は説明を目的として挙げたもので、本発明の範囲をこれらに限定するものではない。

### 実施例

本発明の具体化では、特記のない限りは、細胞培養、分子生物学、微生物学、組換えDNA及び免疫学の従来からの技術を用いており、その分野の技術の範囲内である。これらの技術については、文献に詳しい説明がある。例えば、サムブルック(Sambrook)ら、Molecular Cloning: A Laboratory Manual, Second Edition (1989) Vols. I-3; D. N. グローバー(Glover)編、DNA Cloning (1985) Vols. I and II; B. D. ヘイムズ(Hames)ら編、Nucleic Acid Hybridization (1984); B. パーバル(Perbal)、A Practical Guide to Molecular Cloning (19

84)、Methods in Enzymology(シリーズ)、Academic Press, Inc.; R. L. ロドリゲス(Rodriguez)ら編、Vectors: A Survey of Molecular Cloning Vectors and Their Uses (1987), Butterworths; 並びに、J. H. ミラー(Miller)ら、Experiments in Molecular Genetics (1972), Cold Spring Harbor Laboratory を参照。

我々は、INTOXチャンバを改変していない。48匹までのマウスを同時にエアロゾル投与量に晒すことができる。噴霧器中に配置されたDNA：リボソーム複合体溶液の全量の約0.02%を、各マウスの肺に実際に染み込ませる。

### 実施例1

#### *in vivo* 遺伝子治療のためのプラスミドの調製

哺乳細胞のトランスフェクションに用いられているプラスミドの詳細は下記に示す。

**pRSVCAT**: このプラスミドのコンストラクションは、ゴルマン(Gorman)ら、Proc. Natl. Acad. Sci., USA., (1982), 79:6777-6781に記載されている。このpRSVCATプラスミドには、3'-RSVLTRは、CATコーディング配列の上流にプロモータとして並置されている。LTR転写開始部位とCAT開始コドン（開始部位の下流の最初のAUG）との距離は約70bpである。

**pS'PRL3-CAT**: このプラスミドのコンストラクションは、サカイラ、Genes and Development (1988) 2:1144-1154に記載されている。

**pSIS-CAT**: このプラスミドのコンストラクションは、ホアン及びゴルマン、Nucleic Acids Research (1990) 18:937-948に記載されている。

**pZN20**: このプラスミドのコンストラクションは、図3に説明されている。このプラスミドは下記のようにして調製した。pCATwt7.6.0(スティンスキ(Stinski)とロウラー(Roehrz)、(1985) J. Virol., 55:431-441)をHindIIIで処理し、HCMV主体IE1エンハンサー及びプロモーター要素を含むフラグメントを精製した。その後、単離フラグメントを、pSP7.2(プロメガ)のHindIII部位へクローニングしてpZN9を作製した。エンハンサー及びプロモーター要素が図3に示されているクローンをスクリーン(選抜)した。pZN9の部分的

HindIII消化の後、平滑末端にDNAポリメラーゼI クレノウフラグメントを添加した。得られたクローンpZN12は、エンハンサー及びプロモーター要素の5'のHindIII部位を失っていた。その後pZN12をNcoI及びHindIIIで処理し、大きいNcoI-HindIIIフラグメントを精製し、pBC12/CMV/IL-2(クーレン(Cullen)、Cell (1986) 46:973-982)由來の精製された小さいNcoI-HindIIIフラグメントに連結した(ライゲーション)。pBC12/CMV/IL-2はAD169株由來のHCMVプロモーターを含む。得られたクローンをpZN13とした。pZN13をBamHIで部分消化し、DNAポリメラーゼI クレノウフラグメントを添加し、得られたクローンをエンハンサー及びプロモーター要素の5'末端でBamHI部位を失っているクローンをスクリーンした。得られたクローンをpZN17と呼んだ。pZN17をHindIII及びBamHIで処理し、得られたHindIII-BamHI大フラグメントを精製し、pSV2-CAT(ゴルマンら、(1982) Molecular Cell Biology, 2:1044-1051)から得られた精製された小HindIII-BamHIフラグメントと連結した。得られたクローンをpZN20とした。HCMV(Towne)の全長制限地図は図19Aに示されている。HCMV(AD169)は図19Cに示されている。2つのプロモーターの比較は図19Bに示されている。Towne株由来のものと比較した場合に、実質的により高い発現はAD169株由来のプロモーターを用いた際に得られる。pZN20はNcoI部位の5'側にTowneの配列とNcoI部位の3'側にAD169の配列とを有する複合プロモーターを含む。NcoI部位は、図19Bでアスタリスクによって表示されている。pZN20はこの複合HCMVプロモーターと、その後にCAT遺伝子、SV40のt-イントロン及びSV40のポリA付加部位とを有する。

**pZN27**: このプラスミドのコンストラクトは図7に説明されている。pZN27は複合HCMVプロモーターとその後にSV40のt-イントロン、CATコーディング配列及びSV40のポリA付加部位を、この順で有する。

**pZN46**: このプラスミドのコンストラクトは図27A及び図27Bに説明されている。pZN46は、複合HCMVプロモーターとその後にヒトIL-2遺伝子、ラットのプレプロインシクリン2イントロン及びラットプレプロインシ

ュリン2遺伝子由來のポリA付加部位を含む。これらの最後の3つの成分は、ケーレン(Cell 46:873-882(1986))のpBC12/CMV/L-2プラスミド由来であった。ラットブレプロインシュリン2イントロンは、内部の162bp NdeI フラグメントを欠損することによって改変された。

pZN3-2: このプラスミドのコンストラクトは図10に説明されている。pZN3-2は、複合HCMVプロモーターと、その後にpZN4-6で説明されたラットの改変ブレプロインシュリン2イントロン、CFTRのcDNA及びpZN4-6で説明されたブレプロインシュリン2遺伝子ポリA付加部位を含む。CFTRのcDNAは、F.コリンズ(Collins)(ミシガン大学)から供与されたpBQ4-7から得られた。

pZN5-1: このプラスミドのコンストラクトは図11に説明されている。pZN5-1は、複合HCMVプロモーターとその後にCATコーディング配列及びSV40ポリA部位を含む。

pZN6-0, pZN6-1, pZN6-2, pZN6-3: これらのプラスミドは図19に示されている。pZN6-0はHCMV複合プロモーターと、その後に改変されたラットブレプロインシュリン2イントロン、CATコーディング配列及びSV40ポリA付加部位を含む。pZN6-1はpZN6-0と同一であるが、イントロンの5'側に166bpの付加を含む。この付加DNAはpBC12/CMV/L-2プラスミド中のイントロンのすぐ5'側の166bpであり、ラットブレプロインシュリン2遺伝子コーディング配列を含み得る。pZN6-2は、イントロンがpZN6-0における5'よりはむしろCATコーディング配列の3'側のものである以外はpZN6-0と類似している。pZN6-3はイントロンの5'側の166bpの付加を除いてpZN6-2と同一である。これはpZN6-1で記述されたものと同一の付加配列である。

#### 実施例2

脂質キャリアー核酸複合体のエアロゾル化送達後のげっ歎類の肺におけるクロラムフェニコールアセチルトランスクペラーゼ(CAT)遺伝子の発現  
脂質キャリアとして使用されたのは、プラスミドpRSV-CAT(ゴルマン

ら、Proc. Natl. Acad. Sci. USA (1982) 79:6777-6781; ヨング及びゴルマン、Mol. Cell. Biol. (1980) 10:1805-1810)と、RSVの長終結反復により生じるCAT遺伝子を含有するプラスミドと、pRSV-β-galプラスミド(ハンジンスキーラ、Am. J. Respir. Cell Mol. Biol. (1991) 4:206-208)である。

pRSV-CATプラスミドをリボソームに複合させ、下記の手順で体重2.5gのメスBalb/cマウスに投与した。pRSV-CAT 2mgを、リン酸塩緩衝食塗水中のDOTMA(GIBCO BRL、グランドアイランド、ニューヨーク州)/コレステロール(2:1)小さな単ラメラリボソーム4μmolと混ぜてから、Acorn I噴霧器(マルケスト・メディカル・プロダクツ社、イングルウッド、コロラド州)を使って、イントックス霧露器(イントックス・プロダクツ、アルバカーキ、ニューメキシコ州)に入れたラット又はマウスの群に噴霧した。0.5mgのpRSV-CATを1.0μmolのDOTMA-コレステロール(2:1)と混合したもの、また2.0mgのpRSV-CAT単独についても同様の手順を実施した。2ないし5日後に、動物を犠牲死させ、肺を採取した。未処理の対照群からも肺を採取した。肺はホモジナイズし、細胞を3回の凍結融解サイクルで破壊した。肺抽出物の一部のCAT活性を、ウォルブル、Science (1980) 247:1465-1468による標準的なアッセイを用いて測定した。

#### 結果

図20を見てわかるように、2.0mgのRSV-CATと4.0μmol DOTMA/コレステロール(2:1)とを投与された動物ではCATタンパク質が発現したのにに対して、対照動物ならびにRSV-CAT DNAのみの投与、もしくは低用量のpRSV-CAT:DOTMA:コレステロール複合体の投与を受けた動物では発現は見られなかった。pRSV-β-galを、5.0mgのpRSV-β-galに5.0μmolのDOTMA/コレステロール(2:1)と混合するという以外、まったく同様の手続きを行った。β-gal活性の有無については、標準的な組織化学的染色法により調べた。曝露されたラットの気道上皮細胞にβ-gal活性が認められた。

CMVプロモーターによるCAT遺伝子を含むプラスミドについても試験した。このプラスミドは、M. T. F. ホアン及びC. M. ゴルマン、Nuc. Acids Res.

(1990) 18:937-947に述べる方法に従って作製したが、そこではプラスミドpMS-1. CATにSV40プロモーターを使っているのに対して、CMVプロモーター及びハイブリッドイントロン配列を用いた点が例外である。要約すると、CAT脂質キャリアは、まず最初にCMVプロモーターを含有するpML主体のプラスミドを作製し、その後にアデノウィルスメジャー後期(AML)領域からの5'側未翻訳リーダーの部分が続く。この領域には、三部分(tripartite)リーダーの最初のエクソンの初めの13のヌクレオチドと、AML領域からの介在配列(IVS)の部分を除くすべての部分が入っていた。合成オリゴヌクレオチドを挿入し、1gG可変領域の機能的スプライス受容配列を得るために、それをアデノウィルスのイントロンと併合した。ボズウェル(Bothwell)ら、Cell (1981) 24:625-637参照。このプラスミドをイントロンの境界となる2つの制限部位(Cla I及びPst I)で切断して、2-8.2bpのフラグメントを取り出した。適合する合成オリゴヌクレオチド・リンクを挿入した。このプラスミドを、pCIS-CATと名付けた。

pCIS-CATを使ってCAT遺伝子の発現について試験するために、1.2mgのpCIS-CATを2.4μmolのDOTMA/DOPE(1:1)と混ぜた。ICRメスマウスを、異なる3つのエアロゾル受容チャンバーに入れた。全てのマウスにも、先に述べた方法でリボソームに複合させたCAT発現プラスミドを同量ずつ投与した。動物1~3は、イントックス設計のエアロゾルチャンバーでエアロゾルに曝露させた。動物4~7は、個々のマウスを分ける仕切りつきの改良ラットケージでエアロゾルに曝露させた。動物8~10は、イントックスチャンバーで使用された拘束装置に入れた後で、似ているがより小さい改良マウスケージに入れた。エアロゾル曝露の48時間後に、動物を犠牲死させて、全肺についてクロマトグラフィーCATアッセイを使ってCAT発現をアッセイした。図21に示すように、單一エアロゾル投与量の陽イオン性リボソームに複合させたCAT遺伝子発現プラスミドは、マウスの肺に高レベルの注入遺伝子発現をもたらすことができる。マウスが吸入するエアロゾルの量を最大限にすることによって作られているイントックス霧露器中のエアロゾルミストに曝露した7匹のマウス全部(動物番号1~3及び8~10)の肺に、有意なレベルの注入遺伝子発現が見られ

る。ここで見られる量の変動は、他のエアロゾル実験で見られるものに匹敵し、エアロゾルミストへの曝露の変動、鼻導通効率の個体間の差等によって説明できる。

#### 実施例2

##### 脂質キャリアと脂質キャリアに複合するDNAとの調製

陽イオン性脂質例えは(N(1~2~3-ジオレイロキシ)プロピル)-N,N,N-トリエチルアンモニウム(DOTMA)、ジメチルジオクタデシルアンモニウムプロマイド(DDAB)又は1,2-ジオレオイロキシ-3-(トリメチルアンモニオ)プロパン(DOTPAP)又はリシニル-ホスファチジルエタノールアミンと、第2脂質例えはジオイルホスファチジルエタノールアミン(DOPC)又はコレステロールとを含む脂質キャリアが下記のように調製された。

##### 脂質キャリアの調製

脂質例えは、DDAB、L-リシニル-ホスファチジルエタノールアミン(L-Pe)、E-PC、E-DMPC、コレステロール-エステル-β-アラニン(CEBA)、DOTAPと、コレステロール(Chol)とを、クロロホルムに溶解した。各脂質の好適な量(最終脂質キャリア配合物における各脂質の所望のモル比によって規定され、通常1対1モルの陽イオン性脂質対非陽イオン性脂質であるが、5~1対1~5の範囲を採る)を共に混合して、回転式蒸発器によって乾燥するまで蒸発させた。その後、該脂質フィルムを、水又は脂質キャリア緩衝液(2.5mMのトリス-HCl、pH 7.4、100μMのZnCl<sub>2</sub>等張液)中5%のデキストロースを付加した後にポルテックス処理によって再懸滴し、最終濃度2.0mMの多重ラメラ小胞(MLV)を作製した。小さい単ラメラ小胞の調製には、その後、この混合物を音波粉砕槽中で15分間、音波粉碎し、脂質キャリアを使用まで4°Cアルゴン下で保存した。

##### プラスミド調製:

プラスミドを運ぶE. coli株を37°CでTBにおいて成育させた。プラスミド精製方法は、サムブロックら(Molecular Cloning, 第2版、1989、コールド

スプリングハーバーラボラトリープレス社)によって記述されている“アルカリ溶解”及び“ポリエチレン glycol を用いた沈殿によるプラスミド DNA の精製”の改変手法とする。この改変は PEG による DNA の沈殿を省いていることである。最終 DNA 調製物は、1.0 mM の Tris-HCl pH 8.0 に溶解した。

#### 脂質キャリアー-プラスミド複合体の調製

プラスミドを所望の濃度(通常、1 μg/μl)に 5% デキストロース水溶液に別途希釈した。脂質キャリアーもプラスミドと同一の容量に 5% デキストロース水に希釈した。

使用される脂質キャリアーの量は、リボソーム脂質モル比添加プラスミド g の比に基づいて規定され。例えば脂質キャリアー：プラスミド = 1 : 1 であり、1 ミリモルの陽イオン性脂質を 1 μg のプラスミド DNA と混合した。その後、プラスミドと脂質キャリアーと共に混合して DNA : 脂質キャリアー複合体を形成した。  
**投与量注入** 少なくとも 50 μg であり、規則的には陽イオン性脂質キャリアーに複合されたプラスミド DNA 1.00 μg をマウス当たりに注入した。プラスミドのみの注入には、少なくとも 500 μg 及び規則的には 2 mg のプラスミド DNA をマウス当たりに尾静脈によって注入した。

#### 実施例 3

##### pZN2.7-DDAB:コレステロール脂質キャリア複合体の

##### 静脈(i.v.)注入後の肺におけるCAT遺伝子発現の免疫組織学による証明

脂質キャリアー：DDAB:Chol = 1 : 1、脂質キャリア緩衝液中 2.0 mM で保存。

プラスミド：pZN2.7

DNA:脂質キャリア比：脂質キャリア：プラスミド = 5 nmol 陽イオン性脂質 : 1 μg DNA

DNA投与量：5% デキストロース水溶液 2.00 μl 中 1.00 μg プラスミド

#### In vivo CAT遺伝子発現のレベルによる i.v. 注入された pZN2.0-陽イオン性脂質キャリア複合体の量の効果

メス ICR マウス(シモンソンラボ、ギルロイ、カリフォルニア州)は、0.01、0.1、1 μmol の DDAB:DOPE 脂質キャリアに複合された各々 0.01、0.1、1 mg の pZN2.0 発現プラスミドを含む 5% デキストロース水溶液 1 ml で、腹腔注入された。マウスを 4.8 時間後の犠牲死させ、器官を摘出してハンドヘルドのホモジナイザを用いて組織を 0.25 M のトリス-HCl 緩衝液 pH 7.8 中でホモジナイズした。細胞質抽出物を作製しタンパク質含量で基準化して、その後 CAT タンパク質のレベルを測定した。実験は 3 回を 1 群とし、結果はアセチル化クロラムフェニコールの平均 dpm ± SEM で表す。

方法：DDAB を含む脂質キャリアを DOPE に対して 1 : 1 モル比に下記のようにして調製した：クロロホルム溶解 DOPE 1.0 μmol とエタノール溶解 陽イオン性脂質 1.0 μmol を回転式蒸発器で乾燥まで蒸発させた。滅菌水 1 ml を添加して、混合物を音波粉碎機(ラボラトリ・サプライ社、ヒックスビル、ニューヨーク州)中で 2.0 分間音波粉碎した。脂質キャリアは約 1.0 ± 2.5 nm の平均径を有していた。CAT アッセイのための、細胞抽出物を作製し、そのタンパク質含量を、クマジブルーアッセイ(バイオラド社、リッチモンド、カリフォルニア州)によって測定した。肺、脾臓、肝臓及び心臓抽出物からの 1.00 μg 及びリンパ節抽出物からの 5.0 μg のタンパク質を、前述(ゴルマン、前出)のように、<sup>14</sup>C 標識化クロラムフェニコールと反応させて、クロマトグラフィーにかけた。dpm の算出のため、アセチル化物と非アセチル化物と共に TLC ブレードから切出し、シンチレーションカウンタで放射活性を計測した。アセチル化物及び非アセチル化物のカウントとの間の割合は、平均 dpm の算出の用いられた。未処理対照動物の組織からの平均 dpm を、各組織からの各処理動物から引算した。

結果：in vivo での潜在的投与量反応性相関を評価するために、1 群につき 3 匹の動物に、0.01 μmol、0.1 μmol 又は 1 μmol の DDAB:DOPE 脂質キャリアに複合された各々 0.01 mg、0.1 mg 又 1 mg の pZN2.0 プラスミドを注入した。0.1 mg 及び 1 mg DNA 投与量は共に、アッセイされた

DNA をマウス当たり尾静脈から i.v. で注入した。

マウス：ICR、メス、2.5 g。

#### in vivo 处理したマウスの肺切片における CAT タンパク質を検出するための免疫組織染色

方法：pZN2.7-DDAB:Chol 複合体の注入後 4.8 時間で、肺を取り出し、3.3% の OCT で凍結し、OCT で包埋してスナップ凍結した。凍結組織は、6 mm で切り、ガラスライド上へ回収して 4°C アセトンで 10 分間固定して、その後 0.2% Triton X-100 中に配置して膜を透過性にした。その後、切片を 1.2 ~ 4.8 時間、適当な希釈率でモノクローナル抗-CAT 抗体(アリゾナ大学のバーカー・アンティン(Parker Antin)博士から供与された)又はネガティブ对照用アイソタイプ抗体と共にインキュベートした。洗浄後、1) 一次抗体に直接対するビオチン化抗体(ザイメッド社、サンフランシスコ)を 60 分間作用させ、2) その後、ストレプトアビシン-アルカリホスファターゼ複合物(ザイメッド社)を 60 分間作用させし、3) 製造社の取扱書による酵素標識に適応的な基質色素源の作用を行った。その後、スライドを後蓋のために水溶性マウント用媒体へオーバースライドさせた。

結果：結果を図 2A 及び 2B に示し、肺の核酸染色を証明する。染色は肺胞壁に局在し、このことは、肺胞管壁細胞と共に、I 型及び II 型細胞並びに肺胞マクロファージを含めて 7.0% を越える肺血管上皮細胞が DNA 脂質キャリア複合体の単回 i.v. 注入によってトランスフェクトされることを示す。更に、有意な数の細胞管支気道管壁細胞が、CAT タンパク質に対してポジティブに染色し、従って、脂質キャリア-DNA 複合体の i.v. 注入によって in vivo でトランスフェクトされた。従って、肺の大多數の細胞が pZN2.7-DDAB:Chol 複合体の i.v. 注入によってトランスフェクトされた。

#### 実施例 4

##### 腹腔投与後の pZN2.0 の発現

全て器官において高い有意なレベル( $p < 0.005$ )の CAT タンパク質をもたらした。各器官における CAT 遺伝子発現の最高レベルは 1 mg DNA 投与量でもたらされ、DNA-脂質キャリア量の 10 倍増加は、リンパ節 CAT レベルを約 2 倍増加させ、脾臓では 3 倍増加させた。1 mg の pZN2.0 プラスミドのみの腹腔注入は、バックグラウドレベルを越える検出可能な CAT タンパク質をもたらさなかった。

#### 実施例 5

##### p5'PRL3-CAT:L-P-E:CEBA複合物の 静脈(i.v.)注入後の脾臓におけるCAT遺伝子発現の証明

脂質キャリア：L-P-E:CEBA = 1 : 1、脂質キャリア緩衝液に 2.0 mM で保存。

プラスミド：p5'PRL3-CAT

DNA:脂質キャリア比：脂質キャリア：プラスミド = 1 nmol 陽イオン性脂質 : 1 μg プラスミド DNA

DNA投与量：5% デキストロース水溶液 2.00 μl 中 2.00 μg プラスミド DNA をマウス当たり尾静脈から注入した。

マウス：Balb/c、メス、2.5 g

組織抽出手順：尾静脈注入後 4.8 時間で、マウスを犠牲死させ、全脾臓を 1 ml の 0.25 M のトリス-HCl pH 7.8、5 mM の EDTA、8.0 μg/ml の PMSF 中にホモジナイズして、得られた抽出物を遠心分離し、その後上清をサイクルの凍結-解凍操作の付し、その後 2 分間 65°C に加熱した。

CAT アッセイ手順：1.00 μl の抽出物 + 1.0 μl の 2.0 mM アセチル C o A + 4 μl の <sup>14</sup>C-クロラムフェニコール(2.5 μCi/ml、5.5 mCi/mmol、アマシャム社)を共に、3.7°C 6 時間でインキュベートした。3 時間で、更に 1.0 μl のアセチル C o A を添加した。

結果：レーン 2(脂質キャリアのみ)及びレーン 5(脂質キャリア-DNA 複合物)に結果を示し、これは有意なレベルの CAT 活性が処理動物の脾臓抽出物

にあるが、脂質キャリアのみで注入された動物から得られた対照脾臓の抽出物にはないことを表している。

#### pRSV-CAT : L-PE : CEBA複合物の静脈(i.v.)注入後の肺におけるCAT遺伝子発現の証明

脂質キャリア： L-PE : CEBA = 1 : 1、脂質キャリア緩衝液に 2.0 mM で保存。

プラスミド： pRSV-CAT

DNA : 脂質キャリア比： 脂質キャリア : プラスミド = 1 nmol 隅イオン性脂質 : 1  $\mu$ g プラスミド DNA

DNA 投与量： 5 % デキストロース水溶液 2.00  $\mu$ l 中 1.00  $\mu$ g プラスミド DNA をマウス当たり尾静脈から注入した。

マウス： Balb/c、メス、2.5 g

組織摘出手順： 尾静脈注入後 4 時間で、マウスを犠牲死させ、全肺を 1 m l の 0.25 M のトリス-HCl、pH 7.8、5 mM の EDTA、8.0  $\mu$ g/m l の PMSF 中にホモジナイズして、得られた抽出物を遠心分離し、その後上清を 3 サイクルの凍結-解凍操作に付し、その後 20 分間 65°C に加熱した。

CAT アッセイ手順： 1.00  $\mu$ l の抽出物 + 1.0  $\mu$ l の 2.0 mM アセチル CoA + 4  $\mu$ l の  $^{14}$ C-クロラムフェニコール (25  $\mu$ Ci/m l、5.5 mCi/mmol、アマシャム社) を共に、37°C 6 時間でインキュベートした。3 時間で、更に 1.0  $\mu$ l のアセチル CoA を添加した。

#### 結果：

結果は図 9 に示され、これは有意なレベルの CAT 活性 (注入遺伝子の発現の表示) が脂質キャリア : DNA 複合物を注入された動物の肺にある (レーン 5) が、対照動物からの肺にはない (レーン 1 ~ 4) ことを表している。

#### pZN20 : DDAB : DOPE 複合体の静脈(i.v.)注入後の複数組織におけるCAT遺伝子発現の証明

の配合である SUV 脂質キャリアと、同程度又はより高いレベルの in vivo 注入遺伝子発現を併記する。

#### pZN20のみの静脈(i.v.)注入後の in vivo での CAT 遺伝子発現の証明

プラスミド： pZN20

DNA : 脂質キャリア比： プラスミド DNA のみで、脂質キャリアを伴うことなく、注入した。

DNA 投与量： 5 % デキストロース水溶液 2.00  $\mu$ l 中 3.00  $\mu$ g プラスミド DNA をマウス当たり尾静脈から注入した。

マウス： ICR、メス、2.5 g

組織摘出手順： 各組織を 0.3 m l の 0.25 M のトリス-HCl、pH 7.8、5 mM の EDTA 中にホモジナイズして、得られた抽出物を遠心分離し、その後上清を 3 サイクルの凍結-解凍操作に付し、その後 20 分間 65°C に加熱した。

CAT アッセイ手順： 各組織抽出物のタンパク質濃度をニンヒドリン主体タンパク質アッセイ (バイオラド社、リッチモンド、カリフォルニア州) を用いて定量し、各組織抽出物からの同一量の全タンパク質を、37°C 1.3 時間で 1.0  $\mu$ l の 2.0 mM アセチル CoA + 1.2  $\mu$ l の  $^{14}$ C-クロラムフェニコール (25  $\mu$ Ci/m l、5.5 mCi/mmol、アマシャム社) と共に、CAT アッセイに加えた。

#### 実施例 6

DOTMA : DOPE + pSIS-CAT プラスミドの注入は

明らかに検出可能な in vivo における CAT 遺伝子の発現をもたらさない

脂質キャリア： DOTMA : DOPE = 1 : 1、5 % デキストロース水溶液中

プラスミド： pSIS-CAT (ホアン、M.T.F. 及び C.M. グルマン、

1990, Nucleic Acids Research 18:937-947)

#### る CAT 遺伝子発現の証明

脂質キャリア： DDAB : DOPE = 1 : 1、5 % デキストロースに 1.0 mM で保存。

プラスミド： pZN20

DNA : 脂質キャリア比：

脂質キャリア： プラスミド = (A) 8 nmol 隅イオン性脂質 : 1  $\mu$ g プラスミド DNA (SUV) ; (B) 6 nmol 隅イオン性脂質 : 1  $\mu$ g プラスミド DNA (MLV)

DNA 投与量：

5 % デキストロース水溶液 2.00  $\mu$ l 中 1.00  $\mu$ g プラスミド DNA をマウス当たり尾静脈から注入した。3匹のマウス各々がこの量の MLV : pZN20 を受け、3匹のマウス各々がこの量の SUV : pZN20 を受けた。

組織摘出手順：

各組織を 0.3 m l の 0.25 M のトリス-HCl、pH 7.8、5 mM の EDTA 中にホモジナイズして、得られた抽出物を遠心分離し、その後上清を 3 サイクルの凍結-解凍操作に付し、その後 20 分間 65°C に加熱した。

CAT アッセイ手順：

各組織抽出物のタンパク質の濃度をクマジーブルー主体タンパク質アッセイ (バイオラド社、リッチモンド、カリフォルニア州) により定量し、各組織抽出物からの同一量の全タンパク質を、37°C 13 時間で 1.0  $\mu$ l の 2.0 mM アセチル CoA + 1.2  $\mu$ l の  $^{14}$ C-クロラムフェニコール (25  $\mu$ Ci/m l、5.5 mCi/mmol、アマシャム社) と共に CAT アッセイに加えた。

#### 結果：

結果は図 5 に示され、これは pZN20 : DDAB : DOPE 複合体の i.v. 注入の、肺、心臓、肝臓、脾臓、腎臓及びリンパ節を含む 8 の異なる組織における有意なレベルの CAT 遺伝子発現を示す。更に、MLV 脂質キャリアは、同一脂質

比： 隅イオン性脂質 : プラスミド = 4 nmol : 1  $\mu$ g、投与量 : 2.00  $\mu$ l の 5 % デキストロース水溶液中 1.00  $\mu$ g DNA

マウス： ICR、メス、2.5 g

注入： 尾静脈

組織採取及び加工処理：

マウスを 2 日目及び 6 日目で犠牲死にして、肺、脾臓、肝臓及び心臓を採取した。肝臓を除く全器官は 0.5 m l の、肝臓は 2.0 m l の、0.25 M のトリス-HCl、pH 7.8、5 mM の EDTA、2  $\mu$ g/m l のアプロチニン、1  $\mu$ g/m l の E-64 及び 0.5  $\mu$ g/m l のロイペプチド (全プロテアーゼ阻害剤はペーリングガーマンハイム社から購入) 中にホモジナイズした。抽出物を 3 サイクルの凍結-解凍操作に付し、その後 10 分間 65°C に加熱した。

CAT アッセイ手順：

アッセイのための抽出物 1.00  $\mu$ l と 0.3  $\mu$ Ci の  $^{14}$ C-クロラムフェニコール及び 1.0  $\mu$ l の 2.0 mM アセチル CoA とを 37°C で 5 時間及び 24.5 時間のいずれかでインキュベートし、その後、該物質をエチルアセテートを用いて抽出し、TLC ブレード上で解析した。

結果： 処理動物からの抽出物を対照動物からのものとを比較することによって測定した場合に、アセチル化クロラムフェニコール種は認められなかった。従って、高レベルの pZN20 の発現がもたらされるものと同様の実験上の条件下での pSIS-CAT 発現ベクターの使用は、in vivo でアッセイされた全ての組織における検出可能な連結 CAT 遺伝子の如何なる発現も生じ得ない。in vivo での pSIS-CAT の発現の欠落は、高レベルの in vivo 発現を発揮する pZN20 ベクターと比較した場合に、異なるプロモーター-エンハンサー要素 (SV40) のためか、異なるイントロン配列のためかであろう。

結果を図 6 に示す。

#### 実施例 7

## 特表平7-502510 (17)

### DNA : 脂質キャリア複合物と細胞表面リセプターとの相互作用

**細胞及び細胞培養：** CV-1 (アフリカグリーン猿、肝臓)、U 93.7 (ヒト、骨髓性白血病)、マウス赤白血病 (MEL) 細胞、及びK 562 細胞 (ヒト、赤白血病細胞) をアメリカン・タイプ・カルチャー・コレクション (ロックビル、メリーランド州) から得た。CV-1 及びMEL細胞を、5%ウシ胎児血清 (FBS) 添加ダルベッコ最少必須培地 (DME) - H 21 中、37°C及び7% CO<sub>2</sub> で維持した。ラット肺胞II型細胞及びラット肺胞マクロファージを記述されたように単離して精製した (デブス(Debs)ら、Amer. Rev. Respiratory Disease (1987) 135:731-737 ; ドップス(Dobbs), L. 、Amer. Rev. Respiratory Disease (1986) 134:141-145)。II型細胞を 5% FBS 添加 DME - H 16 中、37°C及び7% CO<sub>2</sub> で維持した。2.0 nmolのDOTMA : DOPE脂質キャリアと 2.0 μg のpRSV-CATプラスミドDNAとの複合物を、6.0 mm ファルコンプレラスチックディッシュ中で成長している  $2 \times 10^6$  細胞に添加して (SUV及びMUVのいずれか) 、その後 1 分から 2 時間の時点でEMのために固定した。

#### 電子顕微鏡のための固定及び処理

DOTMA脂質キャリアと組織培養中の又は血液若しくは肺胞から新たに単離した細胞とを、1%ショウガロース含有 0.1 mol/L カロジル酸ナトリウム緩衝液 pH 7.4 中の 1.5% ゲルタルアルデヒドに、1時間室温で固定した。タンニン酸及びウラニルアセテート増加の後、組織をアルコールの段階シリーズ中で脱水し、エボキシ 812樹脂 (アーネスト・F. フラム(Ernest F. Fullam) インク社、ラザム、ニューヨーク州) に包埋し、ダイアモンドナイフを用いて MT 2 ミクロトームにおいて切片を作製し、80 kVで操作したジョエル 100 CX 透過型電子顕微鏡で試験した。結果を図4に示す。

#### 結果

プラスミドDNAに複合した単一及び多量ラメラ脂質キャリアのいずれかのDOTMA脂質キャリアと種々の細胞型 (CV-1 サル腎臓細胞、U 93.7 ヒト骨髓单球白血病細胞、K 562、MEL赤芽球白血病細胞、ラット肺胞マクロファージ及びII型肺胞細胞) との高頻度相互作用は、脂質キャリア付着と典型的な被

T A 中にホモジナイズして、得られた抽出物を遠心分離し、その後上清を 3 サイクルの処理-解凍操作に付し、その後 20 分間 65°C に加熱した。

#### CATアッセイ手順：

各組織抽出物のタンパク質濃度を、クマジーブルー主体タンパク質アッセイ (バイオラド社、リッチモンド、カリフォルニア州) を用いて定量し、各組織抽出物からの同一量の金タンパク質を、37°C 1 時間で 1.0 μl の 2.0 mM アセチルCoA + 1.2 μl の [<sup>3</sup>C]-クロラムフェニコール (2.5 μCi/ml、5.5 mCi/mmol、アマシャム社)と共に、CATアッセイに加えた。

#### 結果：

結果は図8に示されている。有意なレベルのCAT活性が、pZN2.7のみ及びDDAB : コレスチロール脂質キャリアに複合されたpZN2.7のいずれかの注入後にアッセイされた6つの異なる組織 (肺、心臓、肝臓、腎臓、乳腺及びリンパ節) 各々に認められた。他の発現プラスミドの全身性注入後にin vivoでの複数組織における注入遺伝子の発現は、以前に証明されていない。

### 実施例8

#### DDAB : コレスチロールリポソーム-pZN3.2複合体の

**エアロゾル投与後のマウス肺におけるヒトCFTR遺伝子の高レベル表达発現**  
**動物** シモンセン(Simonsen) (ジルロイ、カルフォルニア州) から入手した2ヶ月齢のメスICRマウス。

#### プラスミドDNAの調製

使用したプラスミドリポソーム pZN3.2には、添付の図3～5に示したヒトサイトメガロウイルス前初期プロモーター-エンハンサー要素に融合されたヒトCFTR遺伝子コーディング領域が含まれている。HCMV (Towne) 及びHCMV (AD169) の前初期エンハンサー及びプロモーター領域の完全制限地図は、図18A及び18Cに載っている。2つの配列を、図18Bで比較している。pZN3.2は、アルカリ溶解及び酢酸アンモニウム沈殿を使って精製し、

複数細胞における吸収のものである (図4 a-f)。この相互作用は、リセプター仲介エンドサイトシスのよく研究された例に共通しているものである。陽イオン性脂質キャリア : DNA複合物と接触するように見える全ての細胞は、形質膜への結合後に該複合物を取り込む。これらの全ての細胞型は、同一の吸収の伝統的リセプター仲介エンドサイトシス経路を証明する。ヒト細胞は他の細胞例えばげっ歯類細胞よりも、より効率良くトランスクレクトされる。

#### 実施例6

#### pZN2.7のみ又はpZN2.7 : DDAB : コレスチロールSUV複合体の静脈 (IV) 注入後の複数組織における高レベルのCAT遺伝子発現の証明

#### 脂質キャリア：

DDAB : Chol = 1 : 1、5%デキストロース中 1.0 mM で保存。乾燥脂質フィルムへの 5%デキストロース添加後、SUVを音波粉碎槽において 2.0 分間音波処理して調製した。

#### プラスミド： pZN2.7

#### DNA : 脂質キャリア割合：

陽イオン性脂質：プラスミドDNA = 5 nmol : 1 μg DNA

#### DNA投与量：

pZN2.7のみ：各マウスは 5.00 μg、1 mg、2 mg 又は 5.000 μg を及び、4 時間に第2の 5.000 μg 投与量で、各々、尾静脈注入によって 5%デキストロース 2.00 ml 中の pZN2.7 を受けた。

脂質キャリアに複合されたpZN2.7：5%デキストロース水溶液 2.00 μl 中の、DDAB : Chol SUV脂質キャリア 5.00 nmol に複合された 1.00 μg プラスミドDNAをマウス当たり尾静脈から注入した。

マウス： ICR、メス、2.5 g

#### 組織抽出手順：

各器官を 0.3 ml の 0.25 M のトリス-HCl、pH 7.8、5 mM のED

核酸濃度は 260nm で紫外線吸収により測定した。

#### 陽イオン性脂質キャリアの調製

脂質キャリアは、陽イオン性脂質DDAB (ジメチルジオクタデシルアンモニウムプロマイド) をDDABコレスチロールとして 1 : 1 のモル比で含有する小さな単ラメラ小胞 (直径約 1.0 nm) として調製した。DDABはシグマ (セントリス、ミズリー州) から、コレスチロールはカルバイオケム (サンディエゴ、カルフォルニア州) から購入した。脂質の原液をクロロホルムに溶解した。脂質を丸底フラスコ中で混合し、減圧下で回転式蒸発器上で蒸発乾燥させた。二重蒸留水を加えて、最終脂質濃度がそれぞれ 1.0 mM になるようにし、できあがった混合液を音波処理槽 (ラボラトリー・プライズ、ヒックスヴィル、ニューヨーク州) で約 20 分間音波処理した。

#### プラスミド/脂質キャリア複合体のマウスへのエアロゾル化送達

DDAB : コレスチロール (モル比 1 : 1) リポソーム 2.4 μmol に pZN3.2 12mg を復合させて、同日の異なる時間に 2 回、エアロゾル投与した。逆に荷電している成分が凝集し沈殿するのを防ぐために、リポソームとDNAとは混合する前に滅菌水でそれぞれ別に希釈した。プラスミドDNA 6 mg とDDAB : コレスチロール (モル比 1 : 1) リポソーム 1.2 μmol を、それぞれ水で 8 ml に希釈してから混ぜた。それから 2 台のAcorn 1 噴霧器 (マルゲスト、イングランド、コロラド州) にそれぞれ、4 ml のDNA/リポソーム混合物を入れ、動物をイントックス小動物曝露チャンバー (アルバカーキ、ニューメキシコ州) に入れた。気流速 4 l/min でエアロゾルを発生させた。この容量 (4 ml) のDNA-リポソーム混合物をエアロゾルにするのに約 90 分かかった。動物を曝露チャンバーから 1 ~ 2 時間取り出してから、もう一度同じ手順を 2 回目の 4 ml 投与量で繰り返した。

#### マウス肺におけるヒトCFTRタンパク質の免疫組織化学的染色

エアロゾル曝露後の一定の時点で、マウスを横死させ、直ちに肺を取り出した。3.3 容量 % の OCT (ミルズ・インク) を含有するリン酸緩衝食塩水 (PBS) で肺をゆっくりと浸潤させ、OCTで満たした組織カセットに入れて、ドライアイス/エタノール槽で冷却した 2-メチルブタンで凍結させた。5 mm に切

## 特表平7-502510 (18)

った凍結切片を塗處理したスライド上に採取した。凍結切片を、0.1% Tween 20 含有 PBS (PBST) 中の 4% アセトン又は 2% バラホルムアルデヒドで 10 分間固定した後、CFTTR タンパク質を検出した。その後の希釈及び洗浄はすべて PBST 中で行った。固定後、切片を PBST で 3 回洗浄（それぞれ 5 分間）してから、10% 正常ウサギ血清で 20°C で 10 分間覆った。アフィニティ精製したウサギポリクローナル抗 CFTTR 抗体、 $\alpha$ -1468（ジョンナサン・コーン（Jonathan Cohen）博士（デューク大学）から提供された）を使って、CFTTR の免疫局在化を行った。血清を、希釈（1:1000）した  $\alpha$ -1468 で置換した。抗体被覆切片に更にシリコン化カバースライドをそっと載せて、4°C の満溝チャンバーで 24 時間インキュベートした。その後スライドを 20°C まで加温し、3 回洗浄した。ビオチン化アフィニティ精製したヤギ抗ウサギ抗体（リビド・キャリア・ラボラトリー）を 1:300 に希釈したもので切片を 1 時間覆い、その後洗浄して（10 分ずつ 3 回）、アルカリホスファターゼで標識化したストレプトアビジン（ザイメッド、南サンフランシスコ）で 20 分間置換して、CFTTRに対するウサギ抗体との結合の有無を調べた。AP-レッド（ザイメッド）を色素源として用いて固定化したアルカリホスファターゼを検出した。内在アルカリホスファターゼはレバミゾール（ザイメッド）で阻害された；この他に同時に用いた対照物としては、一次抗体の代わりに正常ウサギ血清を使うこと、未処理マウスからの肺組織を使うことがあった。コダック・エクタクロム 64T フィルム X 50 及び X 250 を使って、顕微鏡写真を撮った。

### 結果

pZN3.2-DDAB：コレステロール（1:1）リポソーム複合体にエアロゾル曝露後 4.8 時間のマウス肺、及び未処理対照群のマウス肺の凍結切片の顕微鏡写真（異なる倍率で見た）を図 11A～11E に示す。ポリクローナル抗 CFTTR 抗体  $\alpha$ -1468 による強い染色が示されるように、気道の大部は、ヒト CFTTR 遺伝子でトランスフェクトされていた。図 11A、11C 及び 11E を参照。目視で調べると、基本的にトランスフェクトされた気道の細胞すべてが陽性に染色されており、気道細胞の大多数が、単回エアロゾル投与量の DDAB-コレ

動物を注入後 2.4 時間で犠牲死させた。この組織抽出手順及び CAT アッセイは、CAT アッセイを 3 時間 37°C でインキュベートし、2.0 mM バラクソン（ライ（Lai）、C.-C. ら、Carcinogenesis 9:1295-1302 (1988)）を肝臓試料に添加した以外は、実施例 1 で記述されている通りであった。結果を図 13 に示す。レーン 1～12 は肺の試料、レーン 13～24 は肝臓の試料である。レーン 1、2、13、14 は pZN5.1；レーン 3、4、15、16 は pZN6.0；レーン 5、6、17、18 は pZN6.1；レーン 7、8、19、20 は pZN6.2；レーン 9、10、21、22 は pZN6.3；及び、レーン 11、12、23、24 は pZN2.7 である。pZN5.1 はイントロンを含んでいない、イントロンを含むするプラスミドと同様に、又はより発現する。

### 実施例 1.1

CMV-CAT-リポソーム又は CFTTR-CAT-リポソーム複合体各々の静脈注入によってもたらされた広汎的と組織及び細胞型特異的 CAT 遺伝子発現

マウス： ICR、メス、2.5 g

リポソーム： DDAB : Chol = 1 : 1 SUV、5% デキストロース水溶液中 1.0 mM

プラスミド： 1) pZN2.7 又は、2) pBE3.8CAT（コンストラクションは、チョウラ、J. Biol. Chem., 266:24471, 1991 を参照）

手順： 3 つの群中のマウスは、1) 处理なし、又は、1.0 μg の 2) CAT 遺伝子（pBE3.8CAT）に融合されたヒト CFTTR 遺伝子の 5' 上流領域の 3.8 kb と、若しくは 3) pZN2.7 と、複合された DDAB : Chol リポソームの単回尾静脈注入を受けた。マウスを 2.4 時間後に犠牲にし、CAT 活性を肺、肝臓、脾臓、リンパ節、腎臓及び心臓において実施例 1.2 に記述されているようにアッセイした。各群からの肺切片の免疫組織学的解説を実施例 1.1 に記述されているように実施した。

テロール（1:1）リポソームに複合した pZN3.2 で、in vivo においてヒト CFTTR 遺伝子によりトランスフェクトされることがわかる。代表的な切片を図 11 に示す。pZN3.2-DDAB：コレステロール（1:1）リポソーム処理動物のいずれでも、肺の損傷、炎症又は水腫の組織学的な証拠はなかった。pZN3.2-DDAB：コレステロール（1:1）リポソーム処理動物と対照動物とを組織学的に判別することはできなかった。ヒト CFTTR 遺伝子の有意な発現は、DDAB：コレステロール（1:1）リポソームに複合された pZN3.2 のエアロゾル単回投与を受けた後少なくとも 6.0 日たったマウスの肺の気道全体の少なくとも 50%、また気道管壁細胞全体の少なくとも 50% で認められる（目視による）。対照群マウスの肺の凍結切片（図 11B 及び 11D）からは CFTTR について検出可能な染色は示されず、図 11A、11C 及び 11E で認められる CFTTR 発現はすべてヒト CFTTR 遺伝子による肺細胞のトランスフェクションに起因するものであることが確認される。

### 実施例 1.0

異なる CAT 遺伝子含有プラスミドの静脈注入後の肺及び肝臓における CAT 遺伝子発現の証明

脂質キャリア：

DDAB : Chol = 1 : 1、5% デキストロース水溶液中 1.0 mM で保存。  
プラスミド：

プラスミドは下記の示す。

DNA : 脂質キャリア比：

陽イオン性脂質：プラスミド = 1 nmol : 1 μg

DNA 投与量：

2.0 μl 容積中 1.00 μg DNA を尾静脈から静脈内注入した。

マウス：

ICR、メス、2.5 g

手順：

結果： 図 14A～F の CAT アッセイは、CMV-CAT が、肺、肝臓、心臓、脾臓、リンパ節及び腎臓において有意な CAT 遺伝子発現をもたらし、一方、CFTTR-CAT は肺特異的遺伝子発現をもたらしたことを証明した。従って、CMV プロモーターは広範囲の組織における連結遺伝子の発現を誘導し、一方、ヒト CFTTR 遺伝子の 5' フランギング領域は i.v リポソーム主体投与後で組織特異性注入遺伝子発現を指向している。

これらのマウスからの凍結肺切片の免疫組織学的染色は、CMV-CAT-リポソーム複合体の i.v 注入が、肺内部の上皮肺胞及び気道細胞において CAT 遺伝子発現をもたらしたことを示した。対照的に、CFTTR-CAT-リポソーム複合体は、気道上皮細胞において、まず、CAT 遺伝子発現をもたらした。（これは in situ ハイブリダイゼーション研究によって決定されたラット肺における内因性 CFTTR 遺伝子発現のパターンに近づいた（トレザイズ（Trezaize）とブッチワルド（Buchwald）、Nature, 353:434, 1991）。これは、注入遺伝子が i.v 注入後で広汎性及び細胞型特異性様式のいずれかでマウス肺内部に発現することができるこの最初の証明である。結果を図 26A～E に示す。

### 実施例 1.2

エアロゾル投与後の陽イオン性リポソームに複合された注入遺伝子の高レベル、肺特異性発現

動物：

すべての実験で、2 カ月齢のメス ICR マウスを用いた。

プラスミド DNA の調製：

注入遺伝子発現レベルのレポーターとしては、クロラムフェニコールアセチルトランスフェラーゼ（CAT）を用いた（ゴルマンら、Proc. Nat'l Acad. Sci. USA (1982) 79:6777-6781）。使用したプラスミドには、ヒトサイトメガロウィルス（CMV）前初期プロモーター-エンハンサー要素（pCIS-CAT）に融合された CAT 遺伝子が含まれる。プラスミドは、アルカリ溶解及び酢酸アンモニウム沈殿（サムブルックら、(1989)、前出）を用いて精製し、2.6 nm で紫外線吸収により核酸濃度を測定した。真核細胞に CAT 遺伝子は存在しない。そ

の商物は、アセチル基がアセチルCoAから基質クロラムフェニコールに移動すること触媒する酵素である。

#### 陽イオン性脂質キャリア調製：

脂質キャリアは、陽イオン性脂質DOTMAをDOTMA:DOPE(モル比1:1)の形で含有する小さな黒ラメラ小胞(直徑約100nm)として調製された。DOTMAは{N(1-2,3-ジオレオキシ)プロピル}-N,N,N-トリエチルアンモニウム(シンテックス・コーポレーション)、であり、DOPEは中性脂質ジオレオイルホスファチジルエタノールアミン(アバンティ・ボーラー・リビド)である。脂質の原液をクロロホルムに溶解し、-20°Cでアルゴン存在下で保存した。脂質を丸底フラスコ中で混合し、減圧下で回転蒸発器において蒸発乾燥させた。二重蒸留水を加えて、最終脂質濃度がそれぞれ10mMになるようにし、できあがった混合液を音波処理槽(ラボラトリーサプライズ、ヒックスヴィル、ニューヨーク州)で約20分間音波処理した。リポソームは、使用するまで4°Cでアルゴン存在下で保存した。

#### プラスミド/脂質キャリア複合体のマウスへのエアロゾル化送達：

2.4μmolのDOTMA:DOPE(モル比1:1)リポソームと1.2mgのプラスミドの複合体をエアロゾル化し、同一日の異なる時間に2回、マウスに投与した。逆に荷電している成分が凝集し、沈殿するのを防ぐために、プラスミドとリポソームは混合する前に滅菌水でそれぞれ別々に希釈された。プラスミドDN A 6mgとDOTMA:DOPE(1:1)リポソーム1.2μmolを、それぞれ水で8mlに希釈して混ぜた。それから2台のAcorn I 噴霧器(マルゲスト、イングルウッド、コロラド州)に4mlずつ入れ、動物をイントックス小動物曝露チャンバ(アルバカーキ、ニューメキシコ州)に入れ、気流速4L/分でエアロゾルを発生させた。4mlをエアロゾルにするのに約90分かかった。動物をチャンバから1~2時間で取り出し、その後もう一度同じ手順を2回目の4mlで繰り返した。

#### CAT活性の放射アッセイ：

エアロゾル曝露の1日後から21日後にCO<sub>2</sub>チャンバ中で犠牲死させた動物から器官を摘出し、冷リン酸緩衝食塩水(PBS)で洗浄してから、ハンドヘル

ドの組織ホモジナイザーを使って、肺及び脾について5 mMのEDTAを含有する250mMのトリス-HCl(pH 7.5)で、肝臓、心臓及び腎臓については、5 mMのEDTAに加えてプロテアゼ阻害剤のアブロチニン、B-64、及びロイペプチド(ペーリング・マンハイム)を含有する250mMのトリス-HCl(pH 7.5)でホモジナイズした。阻害剤は、アッセイ中に発生したアセチル化クロラムフェニコール種の分解を防ぎ、それによってCAT発現の最適検出を可能にする。

組織をホモジナイズした後で、細胞を凍結融解のサイクルを3回行って溶解し、溶解液を加熱して(65°Cで10分間)、遠心分離した(16,000×g、2分間)。抽出物のタンパク質濃度を、クマジー・ブルーを主体とするアッセイ(バイオ・ラド)を使って測定した。タンパク質濃度を標準化し、抽出物の一部を1.0mMのアセチルCoA(シグマ)1.0μl、[<sup>3</sup>H]標識化クロラムフェニコール(アマシャム)0.3μCiに加え、更に蒸留水を加えて最終的に1.80μlにし、37°Cで8~10時間反応させた(グルマンら、(1982)、前出)。反応後、アセチル化及び非アセチル化クロラムフェニコールを冷酢酸エチルで抽出し、シリカ TLCプレートに滴下し、クロロホルム:メタノール(95:5 v/v)溶媒で展開させた。そのTLCプレートを写真フィルム(コダックX-OMAT)に1~3日間露光し、その後、映像的に読み取った。

#### ゲノムDNAの調製及びサンハイブリダイゼーション：

エアロゾル投与直後にマウスを犠牲死させて肺を取り出した。ゲノムDNAを単離し、ハイポンドN<sup>+</sup>メンブレン(アマシャム)を使ったサンハイブリダイゼーション(サムブルックら、(1989)、前出)により解析した。ランダムプライムによりα-[<sup>32</sup>P]dATPで標識化したCAT遺伝子の1.8kbのフラグメントから、CATプローブを調製した。これにより、約2×10<sup>4</sup> d.p.m./μgの大体特異的なプローブを得た。ハイブリダイゼーション後、メンブレンを2×SSC、0.1% SDSで65°Cで20分間洗浄し、24時間フィルムに露光した。トランスフェクトされたCAT遺伝子のコピー数の概数を求めるために、プロットを、マウス因子VIII-Aゲノムクローンからの1.1kbのBSU36-1の單一コピープローブを用いて、ハイブリダイゼーションさせた(レビンソンら、Genomi

CS(1992)13:862-865)。個々のマウスの肺に沈着したCATプラスミドの相対的な量を、分子ダイナミクス400Aリン光撮影器を使ったリン光撮影解析により定量した(ジョンソンら、Electrophoresis(1990)11:355-360)。CATプローブでハイブリッド形成した後の各レーンにおける保持プローブ量を、因子VIII-A唯一コピープローブでハイブリダイゼーションした後に測定したカウントを使ってレーンあたりのDNA量に標準化した。

#### CAT酵素についてのin situ免疫化学染色：

エアロゾル曝露後の一定の時点で、マウスを犠牲死させ、直ちに肺を取り出した。3.3容積%のOCT(Miles, Inc.)を含有するリン酸塩緩衝食塩水(PBS)を肺にゆっくりと浸潤させ、OCTで満たした組織カセットに配置し、ドライアイス/エタノール槽で冷却された2-メチルブタン中で凍結させた。凍結切片を5μmに切り、複数処理したスライド上に採取した。凍結切片を、0.1%Tween 20含有PBS(PBST)中の4%アセトン又は2%パラホルムアルデヒドで10分間固定してから、CATを検出した。その後の希釈及び洗浄もすべてPBST中で行った。

固定後、切片を3回洗浄(それぞれ5分間)してから、10%正常ウサギ血清で20°Cで10分間覆った。血清を、CATに対する希釈(1:500)ウサギポリクリーナル抗体(バークー・アンチン(Parker Antin)博士及びデビッド・スタンディング(David Stanring)博士、UCSFメディカル・センター)に置き換えた。抗体で覆った切片に更にシリコン化カバースライドをそっと載せ、4°C24時間で湿润チャンバにおいてインキュベートした。その後スライドを20°Cまで加熱し、3回洗浄した。1:300に希釈されたビオチン化アフィニティ精製ヤギ抗ウサギ抗体(ベクター・ラボラトリー)で1時間、切片を覆い、その後洗浄して(10分ずつ3回)、アルカリホスファターゼで標識化したストレプトアビシン(ザイメッド、南サンフランシスコ)で20分間置換して、CATに対するウサギ抗体との結合の有無を調べた。内在アルカリホスファターゼはレバミゾール(ザイメッド)で阻止されることによって、AP-レッド(ザイメッド)を色素源として用いて固定化したアルカリホスファターゼを検出した。ストレプトアビシン抱合体の細胞骨格支上皮細胞に対する疑似粘着可能性を制御するために、一部の切片は一次抗体を

適用する前に遊離アビシン及びビオチンで処理した。この他に同時に行った制御処置としては、一次抗体の代わりに正常ウサギ血清を使うこと並びに、未処理マウスからの肺組織を使うことが含まれる。コダック・エクタクロム64TフィルムX50(図6A、D)及びX250(図6B、C、E、F)を使って、顕微鏡写真を撮った。

#### 結果

最初は、マウスをCMV-CAT発現プラスミド12mgのみを含有する培養から生成したエアロゾル、及びDOTMA:DOPT(1:1)リポソーム24μmolに結合したCMV-CAT 12mgを含む溶液から生成したエアロゾルのいずれかに曝露した。動物を1匹ずつ鼻先が出る円錐体に入れてから、イントックス小動物曝露チャンバに入れた後、エアロゾルを施した。エアロゾル曝露実験中及びその後のいずれでも、マウスに影響や呼吸困難は見られなかった。図7に、エアロゾル実験後72時間で犠牲死させたマウスの肺抽出物について行ったCATアッセイの結果を示す。有意なCAT遺伝子発現が見られたのは、エアロゾル化したDNA/脂質キャリア複合体に曝露したマウスだけであった。

CATタンパク質がどのくらいの間マウスの肺に存在したか、またレポーター遺伝子の発現は肺に限定されたのかどうかについても調べた。動物間で差はあるものの、DNA/脂質キャリア複合体のエアロゾル単回投与の遅くとも21日後には、高レベルのCAT活性が認められる(図24A)。肺で高レベルの発現が示された動物の心臓、脾臓、腎臓又は肝臓の抽出物ではCAT活性は検出されなかった(図24B)。これは、エアロゾル送達後の注入遺伝子発現が肺に限定されることを示唆している。この結果は、正常動物の呼吸器上皮を通じて高分子の物質の浸透がかなり制限されるというこれまでの観察結果と一致するものである。プラスミドDNA/脂質キャリア複合体の分子量は、1.0<sup>6</sup>ダルトンよりも大きい。

これらの実験で用いられた小動物曝露チャンバは、4匹までの各動物に均一なエアロゾル投与を効率よく行うことができるようになっているが、1回の実験のうちでも、マウスの肺におけるCAT活性レベルに有意な差があることがわか

っている。このばらつきの説明として考えられるのは、マウスの肺に沈着するDNA／リポソーム複合体の量が均一ではないということである。この仮説を検定するために、蛍光分析を使ってリポソームの初期肺沈着量を測定し、またサザンプロット分析を使ってDNAの初期肺比着量を測定した。

0.5モル%の蛍光標識した脂質（ローダミン-260スルホキ酸ジルエタノールアミン）を含有しているエアロゾル化陽イオン性リポソーム単独若しくはDNA／リポソーム単独又はDNA／リポソーム複合体を、マウスに投与した。エアロゾル投与直後に動物を犠牲死させ、その肺を摘出し、ホモジナイズして、蛍光分析装置を使ってロードミン蛍光を測定した。動物1匹あたりの蛍光回収率は、投与エアロゾル総量の $0.06\% \pm 0.02$ (SD)であった。これは1回の実験でエアロゾル化されたDNA 12mg中、実際に肺に沈着したのは $10\mu\text{g}$ 未満であることを示唆する。更に、リポソームのみを受けた動物と、DNA／リポソーム複合体を受けた動物の間での脂質沈着に有意差はなかった。噴霧中に複合体の破壊が起こる可能性があるので、エアロゾル化中に沈着したCAT遺伝子の量も評価した(図2-5)。DNA／脂質キャリア複合体のエアロゾル送達直後にマウスを犠牲死させ、全肺DNAを調製した。 $\alpha^{[32]\text{P}}$ 標識化CAT遺伝子で、サザンプロットをプローブした。標識化バンドを走査し、同一実験中の動物間におけるプラスミド沈着の差は4倍未満であった(図2-5)。これらの結果から、エアロゾル化送達後のCAT遺伝子レベルにおける個体間のばらつき(最高10倍)は、肺に最初に沈着した複合体の量の作用だけではなく、取込み部位の違い、肺クリアランス速度、及び／又は様々な肺細胞型の注入遺伝子発現能力の差などを反映していることが示唆された。

*in vivo* でトランスクレクトされた肺細胞の型と割合を調べるために、DNA／リポソーム複合体含有エアロゾルに曝露して72時間後に犠牲死させたマウスの肺を凍結切片化して、ポリクローナル抗CAT抗体でブローチし、対比染色して細胞内CATタンパク質を検出した(図2-2)。DNA／脂質キャリア処理マウスの肺切片では、細気管支及び肺胞成分にまで拡散した免疫染色パターンが認められた。細気管支上皮細胞質が最も強く、且つ不均一に染色された。調べた気道のほぼすべてにおいてCAT抗原が検出され(赤色染色により実証)、染色され

ていないのはごく一部の個体もしくは2～3細胞クラスターだけであった(図2-2A、2-2B)。拡散肺胞パターンは、肺胞管壁細胞の大多数が中等度の染色を示していたことによる(図2-2C)。これらの領域は時としてぼやけて小さくなり、管壁細胞の染色がわずかな場所が、ランダムに散らばっていた。拡散している個々の肺胞管壁細胞の細胞質では、集中的な強度の染色(図中の矢印)が見られた(図2-2C)。一次抗体の代わりに正常ウサギ血清を使ったもの(図2-2D)及び未処理動物の肺切片を用いたもの(図2-2E、2-2F)を対照とした。免疫染色はいずれの対照調製物でも検出できなかった。処理群と対照群のマウスの肺の複数切片を検討したが、エアロゾル処理の副作用を示唆するような有意な病変は見られなかった。

上記の結果から、対象遺伝子を含有し、陽イオン性リポソームと複合されたエアロゾル群回復与量の発現リポソームは、導入部気管及び肺の肺胞の両方の内壁を覆う細胞の大部分をトランスクレクトすること、該遺伝子産物は少なくとも8日間肺に存在すること、その発現は肺特異性であること、また曝露後に損傷を示す組織学的証拠はないことがわかる。従って、エアロゾル化した陽イオン性リポソームは、分裂細胞でも非分裂細胞でも有効なトランスクレクションを仲介する。多くの気道上皮細胞は十分に分化し、ゆっくりと分裂し、又は全くしないため、この点は重要なことである。脂質キャリアは、十分に寛容であり且つ非免疫原性のようである。更に、エアロゾル化及び注入のいずれかのpZEN3.2:DDAB-コレステロール(1:1)複合体で処理されたマウスの外見、挙動及び寿命は、正常であり、未処理、正常の対照動物と区別が付かず、これは、これらのキャリアコンストラクトの毒性及び哺乳動物におけるヒトCFTR遺伝子の過剰発現が無いことを証明している。その上、DNA／リポソーム複合体の反復エアロゾル投与の効果は有効且つ無毒である。エアロゾルによる陽イオン性リポソーム仲介DNA送達は、*in vivo* で高レベルの肺特異的な注入遺伝子発現をもたらす。

個々の論文及び特許出願を特別にまた個別に援用して本文の一部としているように、全ての論文や特許出願を援用して本文の一部とする。

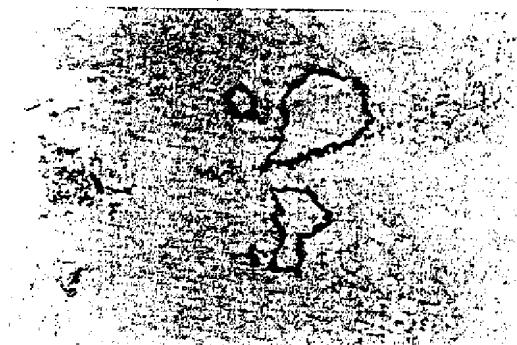


FIGURE 1A

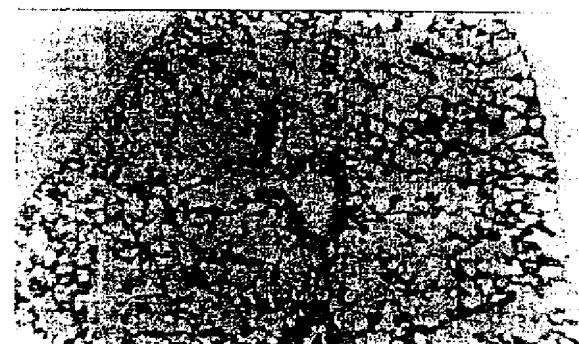


FIGURE 1B



FIGURE 1C

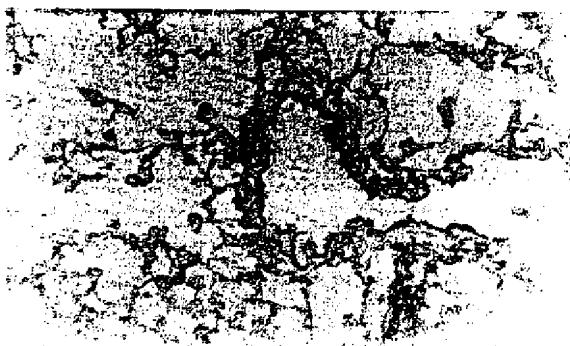


FIGURE 1D



FIGURE 1E

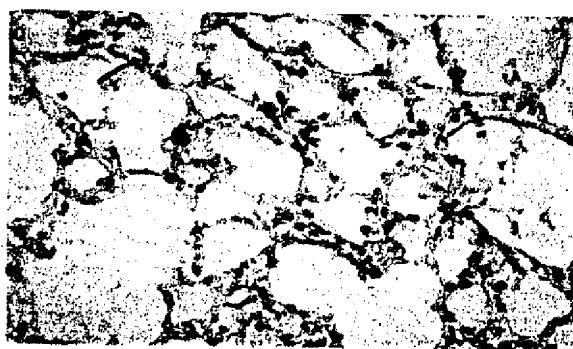


FIGURE 2A



FIGURE 2B

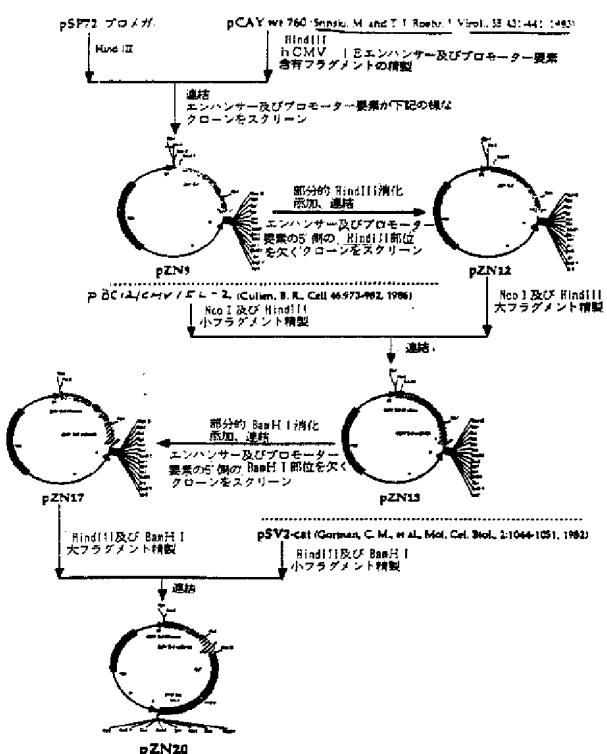


Fig. 3



FIGURE 4

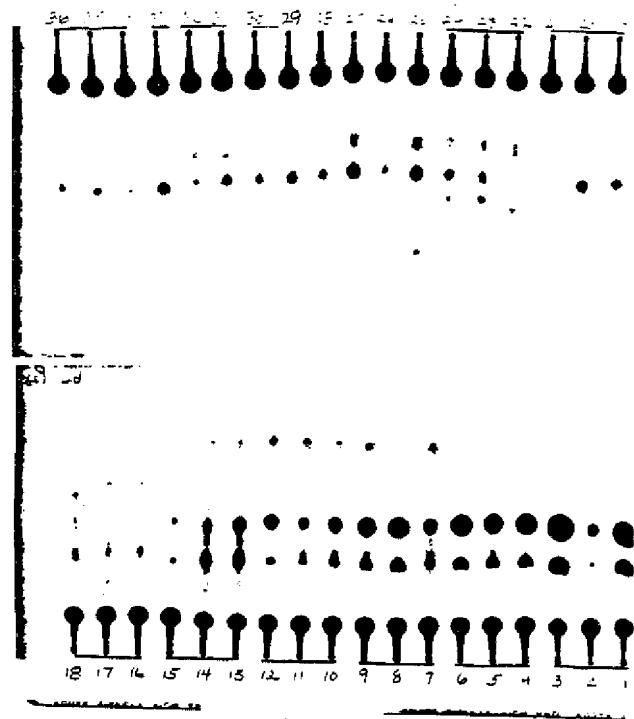


FIGURE 5

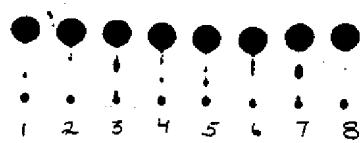


FIGURE 6

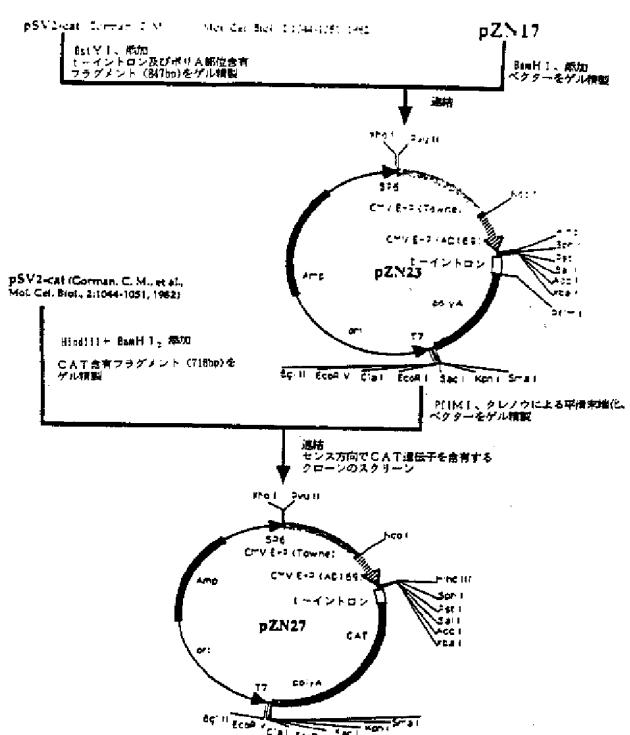
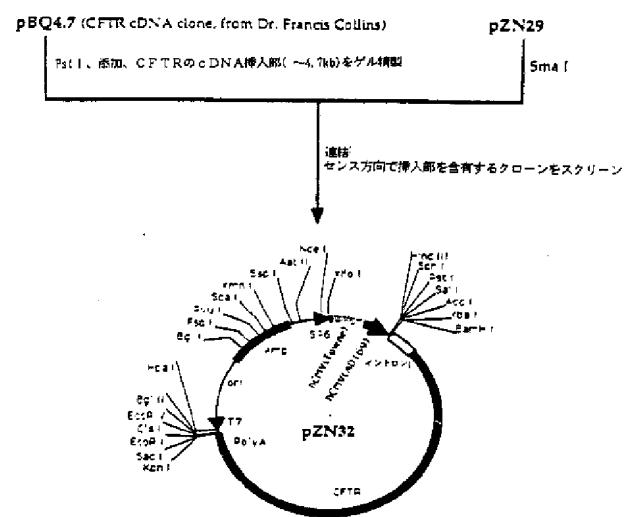
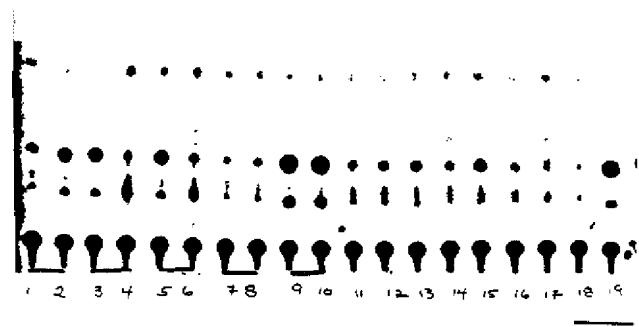
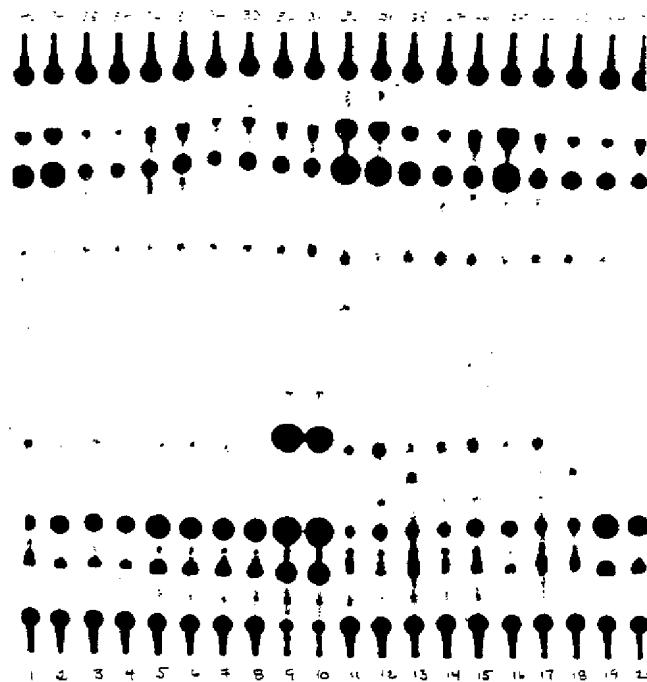


Fig. 7



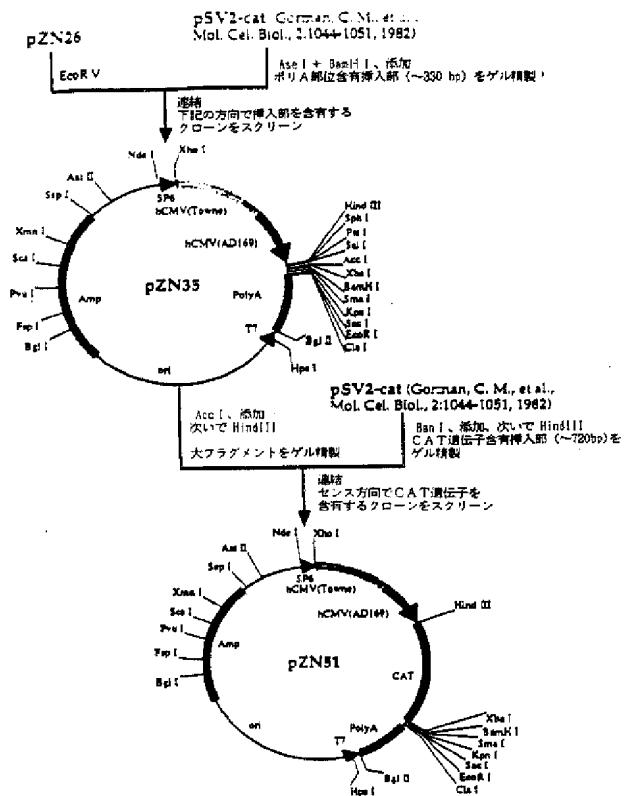


Fig. 17

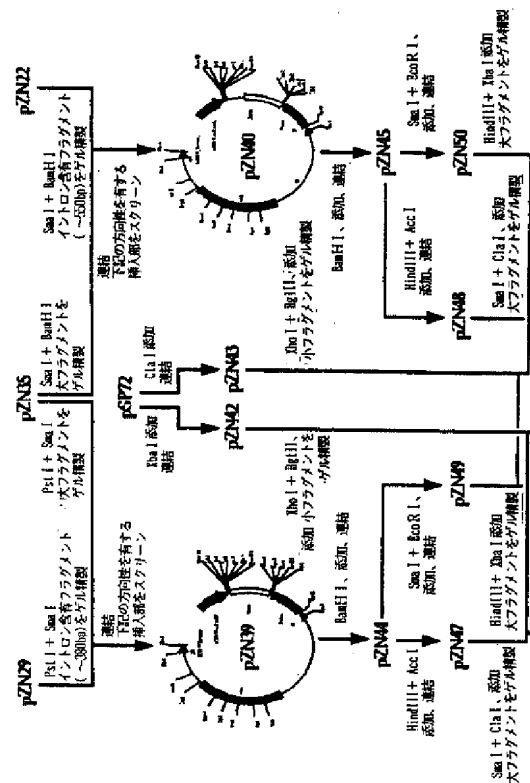


Fig. 12A

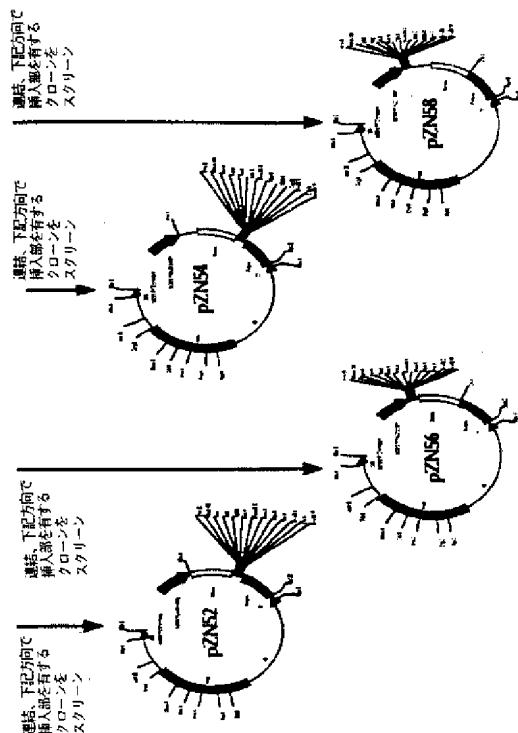


Fig. 12B

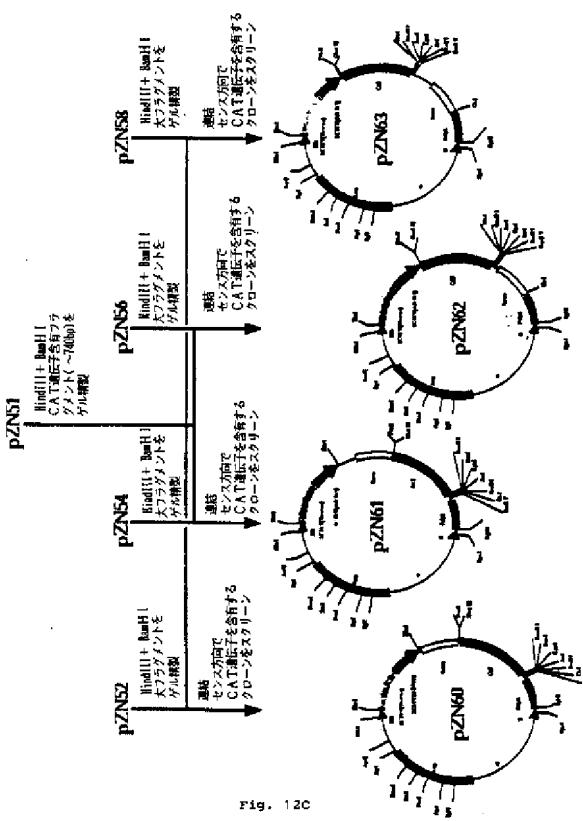


Fig. 12C

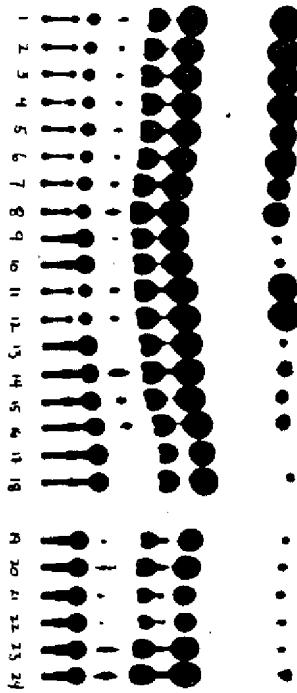


FIGURE 13

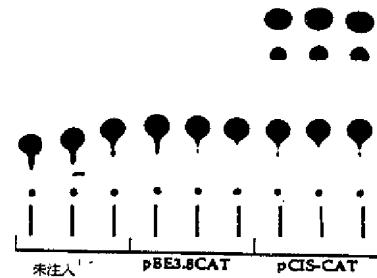


FIGURE 14A

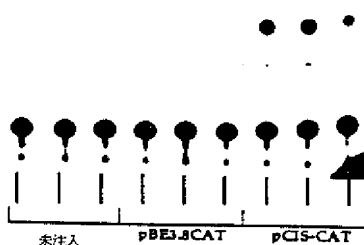


Fig. 14B

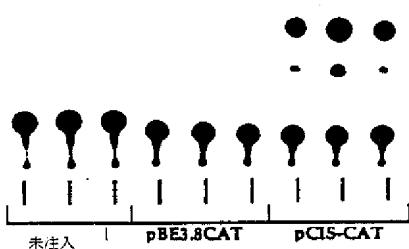


FIGURE 14C

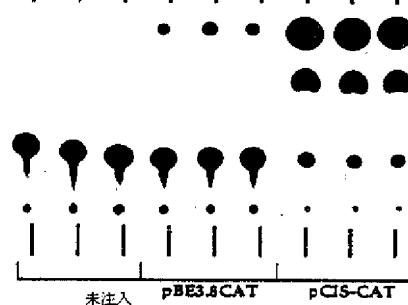


FIGURE 14E

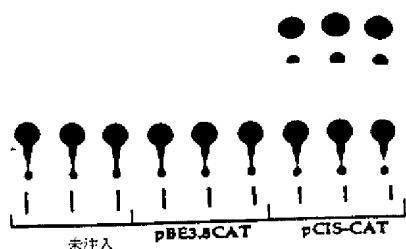


Fig. 14D

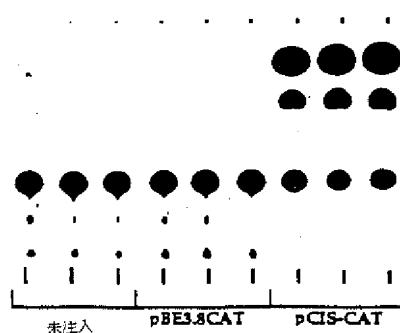


Fig. 14F





特表平7-502510 (28)

200

Fig. 19B(2)

Fig. 19B(3)

Fig. 18C(11)

Fig. 19C(2)

PC455-A0149-1 地図



Fig. 19C(3)

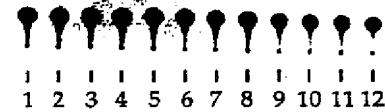


FIGURE 30



FIGURE 31

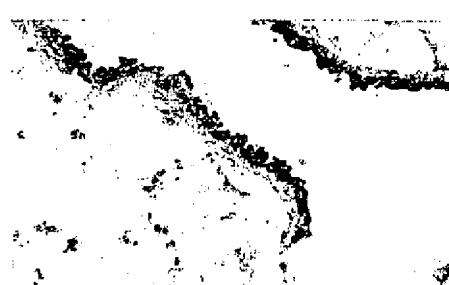


FIGURE 22A



FIGURE 22B

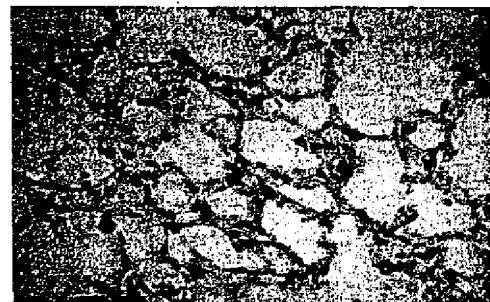


FIGURE 22C

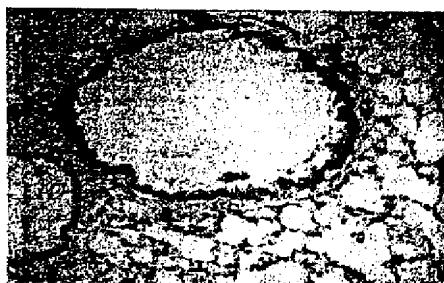


FIGURE 22D

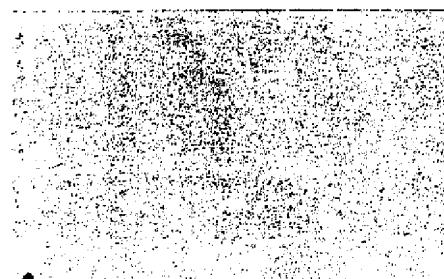
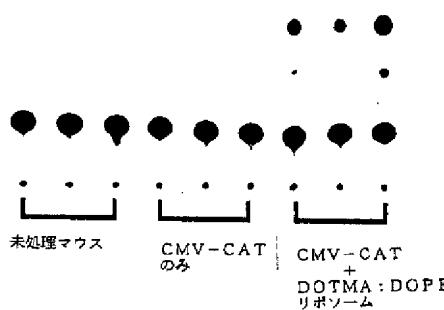


FIGURE 22E



FIGURE 22F



CMV-CAT  
のみ +  
DOTMA : DOPE  
リボソーム

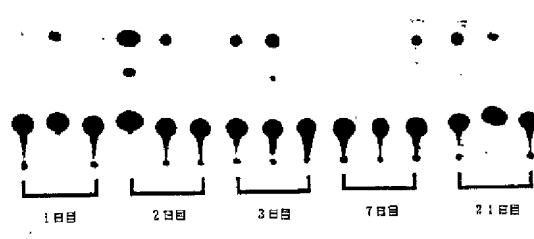


FIGURE 24A

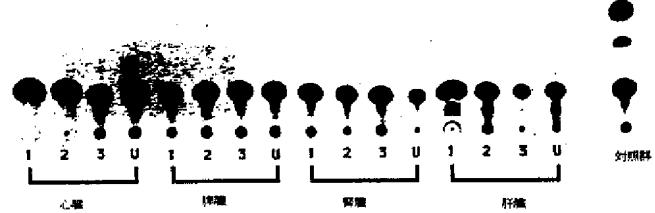


Fig. 24B

Fig. 23

1 2 3 4 5 6 7 8 9  
1 1 1 1 1 1 1 1



FIGURE 25

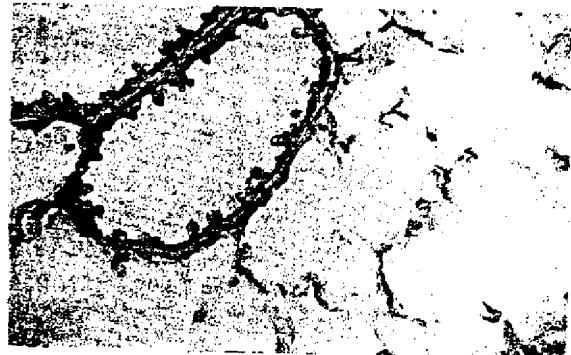


FIGURE 26C

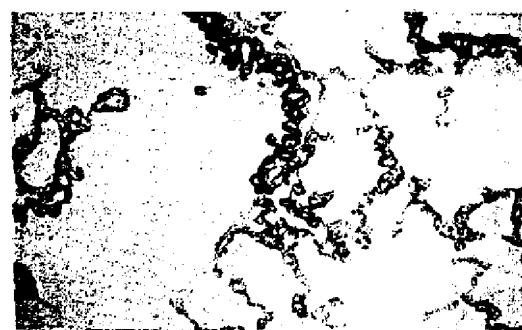


FIGURE 26A



FIGURE 26B



FIGURE 26D



FIGURE 26E

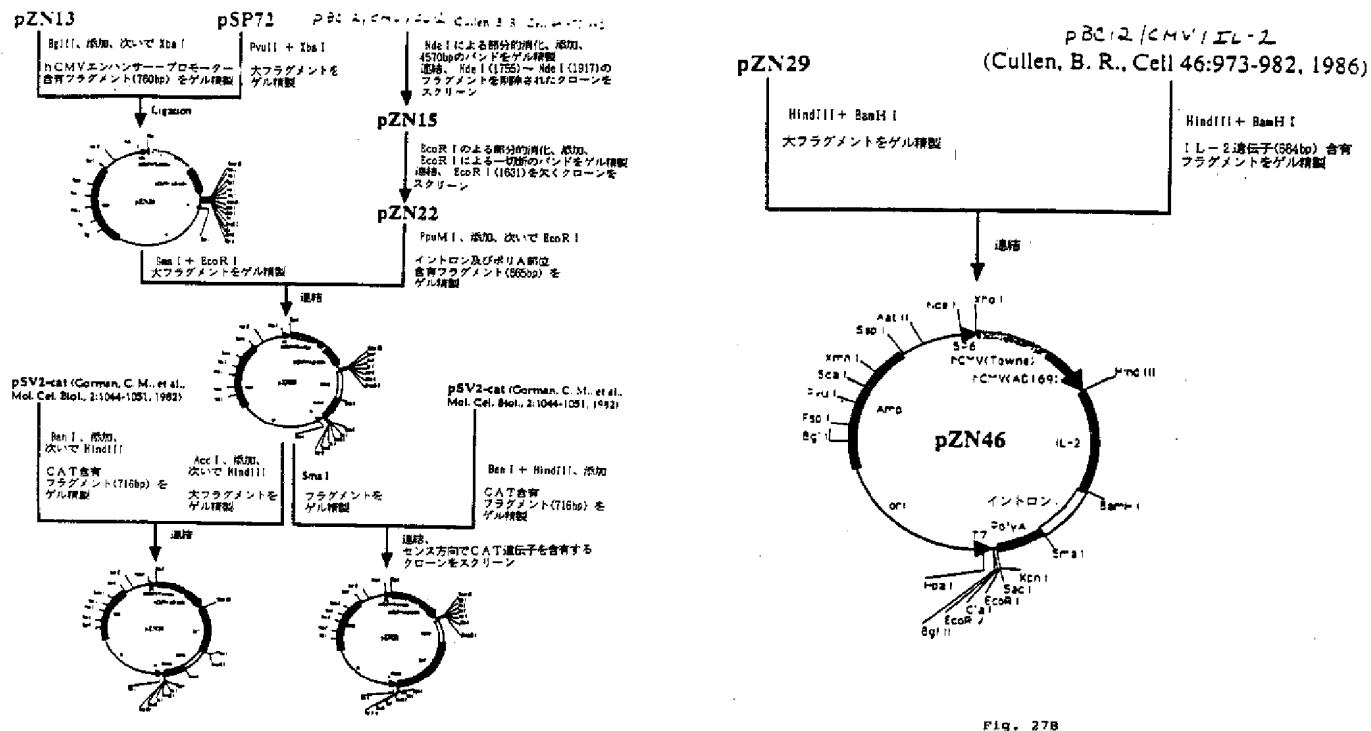
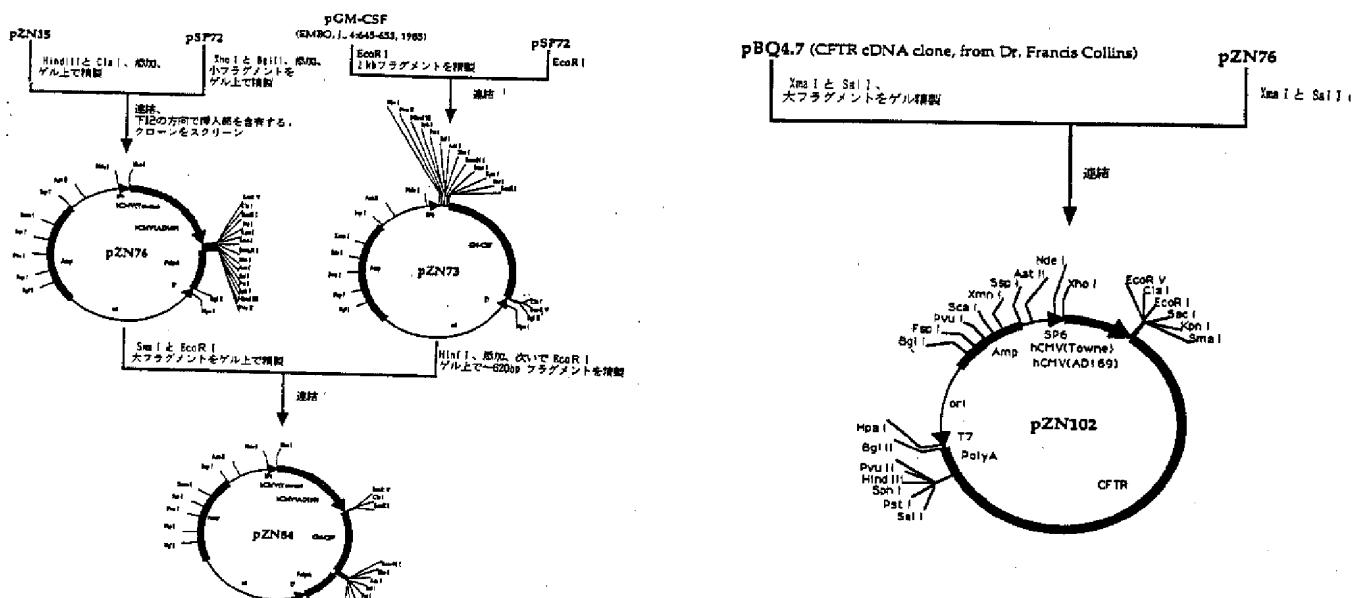


Fig. 27A



## 国際調査報告

International Application No. PCT/US 92/11004

I. CLASSIFICATION OF SUBJECT MATTER (If several classifications apply, indicate all)			
According to International Patent Classification (IPC) or in the National Classification or IPC Int.Cl. 5 C12N15/88; A61K48/00; C12N15/12; A61K47/48			
II. FIELDS SEARCHED			
Molecular Diversities Search			
Classification System		Classification System	
Int.Cl. 5	A61K ; C12N ; C07K		
Document Search other than Molecular Diversities No document found other than Molecular Diversities			
III. DOCUMENTS CONSIDERED TO BE RELEVANT			
Category	Character of Document, if not relevant, more appropriate, or the relevant portion <sup>14</sup>	Reference to Class No. <sup>15</sup>	
P,X	PROCEEDINGS OF THE NATIONAL ACADEMY OF SCIENCES OF USA, vol. 89, no. 23, 1 December 1992, WASHINGTON US pages 11277 - 11281 STRIBLING, R. ET AL. 'Aerosol gene delivery in vivo' see the whole document	1-28	
P,Y	CELL, vol. 58, no. 1, 10 January 1992, CAMBRIDGE MA US pages 143 - 159 ROSENFELD, M.A. ET AL. 'In vivo transfer of the human cystic fibrosis transmembrane conductance regulator gene to the airway epithelium' see the whole document	1-28 ---	
P,X	CELL, vol. 58, no. 1, 10 January 1992, CAMBRIDGE MA US pages 143 - 159 ROSENFELD, M.A. ET AL. 'In vivo transfer of the human cystic fibrosis transmembrane conductance regulator gene to the airway epithelium'	1-28 ---	
P,Y	see the whole document	1-28	
	*/**		
<sup>14</sup> Special category of cited documents: <sup>a</sup> document relating to the general state of the art which is not considered to be of particular relevance <sup>b</sup> document not published or filed before the international filing date <sup>c</sup> document published or filed after the international filing date <sup>d</sup> document which may have some bearing on priority claims or contains matter which may be used in combination with one or more other documents to disclose an invention (e.g. specification) <sup>e</sup> document relating to an EP application, even though it has been published earlier than the international filing date but later than the priority date claimed			
<sup>15</sup> Year of publication or filing date and name of patent office			

Form PCT/ISA/01 (revised 1st January 1986)

II. DOCUMENTS CONSIDERED TO BE RELEVANT (CONTINUED FROM THE SECOND SHEET)			
Category	Character of Document, with indication, where appropriate, of the relevant portion	Reference to Class No.	
P,X	NUCLEIC ACIDS RESEARCH, vol. 20, no. 12, June 1992, ARLINGTON, VIRGINIA US pages 3233 - 3240 YOSHIMURA, K. ET AL. 'Expression of the human cystic fibrosis transmembrane conductance regulator gene in the mouse lung after in vivo intratracheal gene transfer' 'Pulmonary gene transfer' cited in the application see the whole document	1-2, 5, 17, 24, 25, 28	
P,Y	EP-A-0 446 017 (GENZYME CORPORATION) 11 September 1991 cited in the application see page 21, line 26 - page 22, line 2 see page 25, line 8 - line 15; claims 1-10, 16, 17	1-28	
X	see the whole document	1-28	
X	WO-A-9 102 796 (HSC RESEARCH DEVELOPMENT CORPORATION) 7 March 1991 see claims 90-92	1, 7, 8	
P,X	WO-A-9 205 273 (THE REGENTS OF THE UNIVERSITY OF MICHIGAN) 2 April 1992 see page 17, line 30 - page 18, line 2 see page 18, line 28 - line 35; claims see the whole document	1-3, 17, 21, 28	
P,Y	US-A-5 049 386 (EPPSTEIN, D.A., FELGNER, P., LI, THOMAS, R.G., JONES, G.H., RICHARD, B.) 17 September 1991 see column 9, line 9 see column 10, line 43 - line 58 see column 11, line 42 - line 53 see column 13, line 13 - line 17	1-28	
Y	JOURNAL OF IMMUNOLOGY, vol. 140, no. 10, 15 May 1988, BALTIMORE US pages 3482 - 3489 DESS, R.J. ET AL. 'Lung-specific delivery of cytokines induces sustained pulmonary and systemic immunomodulation in rats' see the whole document	1-28	

Form PCT/ISA/01 (revised 1st January 1986)

## 国際調査報告

US 9211004  
SA 69296

This form lists the patent family numbers relating to the patent documents cited in the above-mentioned International search report.  
The numbers are as recorded in the European Patent Office EPO file.  
The European Patent Office is in no way liable for their correctness which are merely given for the purpose of information. 29/04/93

Patent document cited in search report	Publication date	Patent family numbers <sup>16</sup>	Publication date
EP-A-0446017	11-09-91	None	
WO-A-9102796	07-03-91	AU-A- 6161690 03-04-91 CA-A- 2066204 23-02-91 EP-A- 0469058 10-06-92 JP-T- 5500306 28-01-93	
WO-A-9205273	02-04-92	None	
US-A-5049386	17-09-91	US-A- 4897255 30-01-90 US-A- 4946787 07-08-90 AU-B- 594684 15-03-90 AU-A- 5185186 17-07-86 EP-A,B- 0187702 16-07-86 JP-A- 51161246 21-07-86	

For more details about this report: see Official Journal of the European Patent Office, No. 12/93

フロントページの続き

(31) 優先権主張番号 927, 200  
(32) 優先日 1992年8月6日  
(33) 優先権主張国 米国(US)  
(31) 優先権主張番号 972, 135  
(32) 優先日 1992年11月5日  
(33) 優先権主張国 米国(US)

(81) 指定国 EP(AT, BE, CH, DE,  
DK, ES, FR, GB, GR, IE, IT, LU, M  
C, NL, PT, SE), OA(BF, BJ, CF, CG  
, CI, CM, GA, GN, ML, MR, SN, TD,  
TG), AT, AU, BB, BG, BR, CA, CH,  
CS, DE, DK, ES, FI, GB, HU, JP, K  
P, KR, LK, LU, MG, MN, MW, NO, PL  
, RO, RU, SD, SE, US

(72) 発明者 ツー、ニン  
アメリカ合衆国 94116 カリフォルニア  
州 サンフランシスコ セブンティーンス  
アベニュー 2137